

『狗張子』注釈(二)

江 本 裕

本注釈は、『狗張子』注釈(一)、『大妻女子大学紀要—文系—』30、平成11年3月)に続くものである。大妻女子大学大学院(修士・博士課程)の近世専攻の院生を中心に輪読してきたものを基にしたもので、そのメンバーは馳川祐子(修士課程一年)、黒木千穂子(博士課程三年)、合瀬純華(本学大学院研究生)、土屋順子(平成二年修士修了・現本学非常勤講師)の四名である。各人の礎稿を討議し、最終的に江本が閲読した。従って最終的な文責は江本にある。

今回は第二・三巻だけであるが、以後も逐次検証していく予定である。なお目録は巻頭部に総目録(第一―第七巻)が付されているが、今回は第二・三巻のみを載せた。

凡 例

- 一 底本には、便宜、大妻女子大学所蔵の後印本を用いた。
- 一 校訂にあたっては、原本の面目をできる限り保てるようにつとめたが、通読の便を考慮して、次の方針に従った。
- イ 本文に適宜段落を設けた。
- ロ 句読点は極力原文の調子を生かすようにつとめたが、若干私に改めたところもある。

ハ 漢字については、常用漢字表にあるものは、原則として現在通行の字体に改めた。残した略字体・異体字のうち、必要と思われるものは後注に典拠を示した。その際『節用集』『下学集』等の古辞書を利用した。

ニ 仮名遣い・漢字の振り仮名は原文の通りにし、著しく通則からはずれているものは後注に記した。また、原文には無いが必要と思われる振り仮名をへゝに入れて補い、左訓は当該字の下に「」を施して入れた。

ホ 仮名の清濁は私に補正した。

ヘ 誤字・誤刻・衍字と認められるものも原文通りに示し、後注でその旨を記した。

ト 挿絵は省略した。

一 後注は簡潔を旨とした。なお、後注の引用文は読みやすい便を図り、原表記に従っていないところがある。

出典の略称

イ 節用集は原則として「易林本」「書言字考」等とした。

ロ その他の資料は各話の初出箇所で正式名称を記し、以後は適宜略称を用いた。

一 末尾に既出の典拠を記し、他に気付いたものがあつた場合はこれを加えた。なお、中国の作品で、典拠と指摘されているものに限

り、簡単な粗筋を付した。本文における略称の詳細は以下の通りである。

〈山口〉…山口剛『怪談名作集』（『日本名著全集』日本名著全集刊行会、昭和2・10）解説。

〈麻生〉…麻生磯次『江戸文学と支那文学』（三省堂、昭和21・8）初出。（再版以後『江戸文学と中国文学』と改題）。

〈富士1〉…富士昭雄『浅井了意の方法―狗張子の典拠を中心に―』（『名古屋大学教養部紀要』昭和42・3）。

〈富士2〉…富士昭雄『伽婢子と狗張子』（『国語と国文学』昭和46・10）。〈江本〉…江本 裕『了意怪異談の素材と方法』（『近世文芸研究と評論』2、昭和47・5）。

第二卷

交野忠次郎妻を疎て発心する事

死して二人となる事

武庫山の女仙 浦嶋子が箱の事

原隼人佐謫仙の事

形見の山吹

狗はりこ巻之二

○交野忠次郎発心

*河内の国かた野の里に*水崎忠次郎宣重と聞えしは、もとは*駿河国今川家にありしが、*牢浪して河内に来り。交野のわたりに引こもり、思ひがけず*妻をかたらひてすみけり。本より武家の奉公人なれば、耕作商売の所作もしらず、只然るべき君を頼みて軍陣に手が

らをもふるひ、世にたち名をもとらばやとのみ思ひてあかしくらすほどに、*身上ことの外にまづしく、朝ゆふべの煙をたてかねたり。

ある夜のあかつき、忠次郎ねふりさめて妻にかたりけるは、いか成*先世のむくひにや、かゝるまづしき身となりはて、わびしき目をみせ侍べる事、返すぐも面目なき有さまなり。もし世にも出るならば、又おもしろき世にも逢瀬のあるべしとかたる。妻聞て、かゝるわびしき所にて幾世をへたりとも、*いかめしき事のあるべしとも思はず、営とてすべき業もなし。かくて年月をくりて後は、道のかたはら細溝の中にたをれて飢死するより外は有べからず。せめては野ばらのすゑ、往来の道すぢに出つ、手ごろのもの、行過るをうかゝひ、うちころしてはぎとり、追たをしてうばひとり、我にもゆるやかなる心をもつけて給とぞいひける。忠次郎うち聞て、我年ごろは侍の道をたて、まごなき事は露ばかりもせじ、とこそ嗜みけれ。さりともかゝるわびしき中に、情をかけてふかく契りしあひだを去別れんも悲しく、妻がこと業につきて思ひたちつ、夜のあくるを待かね、朝霧のまぎれに、刀をわきばさみ、人ばなれとをき野のすゑ草むらにかくれて待ける所に、年のほど十七八かと覚えし女性の、ちいさきめのわらはに小袋をもたせてうち過るを、折ふし後さきに*人げもなし。刀をぬきてかけ出つ、そのまゝうちころし、二人の女のきる物はぎとり、小袋ともに持そへて家にはしり帰り、よき仕合いたしぬとて妻にあたへ、年のほど十七八かとみえたる世にうつくしき女性なりけるぞや。いかなる里の*誰人の妻なるらん。いたはしなからうちころしけるあはれさよとかたるに、妻これを聞ながら、あはれとも思へるけしきもなく、井のものとあたりにゆきて水をくみつ、うれしげにわらひながら、小袖につきたる血をあらひける顔つき、心ねのおそろしさ鬼のごとくにおもはれ、あきれたる中にうとみはて、半時にても、わが妻とて、そふべきものか情なの心やと、是をほだいのたねとして、もとゆひ*をしきり家を出て、あしにまかせて諸国を修行して、三年にあたる比をひ、*大和国よし野にめぐりきて、日すでに暮しかば

*山本の里に宿をからばやと思ふに、道のほとりに軒あばらなる茅屋のうちに、ともし火かすかにみえし。

立よりて戸をたゝくに、内よりわかき法師の出で誰人ぞと云。諸国修行の聖にて候。日の暮たれば宿かし給へといふ。やすきほどの事、一夜をあかし給へとて、内よび入たり。栗飯とり出で、是にて旅のつかれをやすめ給へとて、我身は持仏堂にうちむかひ、念仏しけるあひだに涙をぬぐふ事幾しきなり。忠次郎入道此有さまをみつ、やうく栗飯くひはて、持仏堂にまいり、*もろ友に念仏しけるが、何となく物あはれにおぼえて、そゝろに涙のおちけるを、念仏はて、後、あるじの法師と只二人うちむかひ物がたりせしま、さて只今念仏のあひだにしきりに涙をおとし給ふは、いか成子細の候やらんとひければ、あるじのほうしこたへけるは、かたるにつけては悲しさのかゝる身になりてもわすれがたき事の侍べり。我はそのかみ*三好日向守の家人なり。いとけなくして父にをくれ、母かたの*祖父は有徳なりける故にその家にやしなはれ、人となりてのち、武家ものうき世の中なれば、只わが名跡をつぎて世をやすくせよとて、ちかきあたり*田宮の里にすみわたり、*北条村より妻をむかへしを、いくほどなく盗人のためにころされて、悲しくも口おしき今更にかぎりなし。その*佛のわすられず、あまりの事には、かの盗人のありかをきかば、たとひ*虎ふす野べ、鯨よる浦といふ、只一人ゆきむかひ、妻の敵はうつべきものをと、別れをしたふ涙さへしばしがほども留らず、袂のかはく隙もなし。かゝる時に世をすてずは*生死のちまたも覚束なく、まよひの夢もさめがたかるべし。うき世の中はこれまでなり。仏道に身をすて、はかなき妻のぼだいをもとふらひ、来生にはさりともしつはちすの契りをむすばんとおもひ定め、此山もとにこもりて念仏して居侍べり。今日はこと更に別れしつまの三とせに帰るを思ひ出で、仏に*花香を奉り、むなしき跡をとふらふ中に、

*うらめしく又なつかしき月日かな

別れみとせのけふと思へば

すつる身ながらも猶わすれかねて、かく思ひつゞけ侍べり。そなたにもおなじ世をそむきし人なれば、*逆縁ながらとふらひてたべとぞかたりける。忠次郎入道つくくゝと聞て、

*年ふればわすれ草もや生ぬらん

みとせのけふと思はれもせぬ

此もの語を聞につけて恥かしき事こそ侍べれ。その女性をこそせしものはそれがしなりとて、初終の事つづさにかたり、我もこれゆへ世をそむきて諸国をめぐる身の、とりわきこよひ此庵りにきたりしは、運のきはめとはいひながら、嬉しう侍べり。そのうしなひし折からは、さこそ悲しく口おしからめ。かたきは我なり。とくくかうべをはねて本望をとげ給へとて、首をのべてさしむかひけり。あるじの法師手をうちていふやう、年月念仏の隙には妻のかたきのあり所をしらせ給へと、神ほとけにもいのり侍べりしに、こよひしも、こゝにめぐり来る事も、心ざしのまことあるゆへぞかし。今はねがひの花ひらけ、*妄念の雲晴たり。此事なくばそなたも我もいかでかぼだいの道にいらん。*仏種は縁よりおこると仏のとき給ふはこれなるべし。今はうらみものこりなく、よろこびの種となり、*一味の雨の沾ほひける*九品のうてなのえんをむすび、おなじ蓮の契りとなりし嬉しさよとて、二人の法師ひたひをあはせて*歡喜の涙をきどころなし。

此上は何かへだてのあるべき。しばらくこゝにとゞまり念仏申てとふらひ給へとて、十日ばかりは二人おなじくおこなひしが、忠次郎入道いとまごひして出けり。後にそのゆくすゑをしらず。あるじの法師もそれより四年の、ち、七日ばかりやまひせしを、あたりちかき村人がかはるぐきたりてかんびやうせしに、さのみぞくるしき色もなく、後世の事物語りいたして、つゐにりんじうめでたく、念仏の息もろ友に*正念に往生す。人々とりまかなふて塚にうづみ、しるしの木をうえて男女あつまり、念仏してとふらひけりとかや。

○河内の国かた野の里 河内国交野郡(現大阪府枚方市・交野市)にあった

荒野。淀川沿いに位置し、古くから遊獵地として有名（『伊勢物語』八二「渚の院」の条など）。戦国時代には戦場となり荒廃した。○水崎忠次郎宣重未詳。

○駿河国今川家 足利氏の支族で、鎌倉時代から駿河国の守護を世襲。文龜元年（一五〇二）氏親の時、遠江を斯波氏から奪い戦国大名となる。

氏親の孫義元は、遠江、駿河、三河の三国を領するが、永祿三年（一五六〇）、桶狭間の戦いで敗死。のち、家督を氏真（天文七年、慶長十九年へ一五三八、一六一四）が継ぐものの家運振るわず、永祿十二年（一五六九）今川家滅亡。

○牢浪 「牢浪 ラウ／＼」（書言字考）。○妻をかたらひて 夫婦の契りを結んで。○身上 経済状態。暮らし向き。○先世 仏語。「ゼンゼ Iejid」（日葡）。ただし、「前世」と表記することが多い。○いかめしき事 堂々と

して立派なさま。立身出世すること。○人げもなし 人の気配のないさま。「ヒトゲモナイ Pitguenonai」（日葡）。○誰人 振り仮名「たれひと」は、「たれびと」の誤刻。○をしきり 押切り。「髪を押切る」は、髪をぶつ

りと切る事から、出家する意。なお、『沙石集』広本系の一本「梵舞本」では、「押切」と表記されている（【出典】参照）。○大和国よし野 大和国吉野郡（現奈良県吉野郡吉野町）。十津川流域を與吉野、吉野川流域を表吉野という。

ここでは、後出「山本の里に宿をからばや」からすると表吉野が妥当か。中世、南朝の所在地。桜の名所としても有名。○山本の里 大和国高市郡山本村（現奈良県橿原市山本村）。畝傍山北麓の村（【余説】参照）。○もろ友

に 諸共に。一緒に。「共」を「友」と表記するのは近世の慣例。「モロトモニ 師友」（黒本本）。○三好日向守 三好長逸（生没年未詳）。山城国飯岡

城主で三好三人衆の一人。永祿八年（一五六五）五月、松永久秀らと共に將軍足利義輝を暗殺。天正元年（一五七三）、信長の侵攻により敗走。のち行方不明。○祖父 「祖父 ヲ、ヂ」（伊京集・饅頭屋本）、「祖父 オホヂ」（易

林本）。○田宮の里 河内国交野郡田宮村（現大阪府枚方市宮本町）。交野遊獵地の内。○北条村 河内国讃良郡北条村（現大阪府大東市北条）。交野

から淀川沿いに南に下った地。東に飯盛山がひかえ、中世の戦略上の要衝で、四條畷の戦の古戦場の一部。○佛 「佛 国字」（『同文通考』四）。「佛

ヲモカゲ 本朝俗字」（書言字考）。○虎ふす野べ鯨よる浦 虎の生息する

荒野や鯨の遊弋する海浜。辺境、異境の意に用いる慣用表現。「セメテ其人ノ在所ヲダニ知タラバ、虎伏野辺鯨ノ寄浦ナリ共、アコガレヌベキ心地シケレ共」（『太平記』四「笠置囚人死罪流刑事」藤房卿事）。○生死のちまた

生死の巷。仏教語。苦しい迷いの境涯。○花香 香華。仏前に供える花と香。「小地藏を花香時々まいらせて、崇め奉りけり」（『沙石集』二）。○う

らめしく 「うらめしく又なつかしき月日かなわかれし人のけふとおもへば」（『二人比丘尼』上）に近い。「なつかしく又うらめしき月日かな別れし去年の

けふとおもへば」（『慕京集』）もある。○逆縁 仏語。縁のない者が、死者の冥福を祈ること。○年ふれば 未詳。○妄念の雲晴れたり 「妄念の

雲」は、迷いの心。雲が晴れるとは、迷いが無くなる事の喩え。「今出家し給はゞ、座禪の床に妄念の雲をはらひ」（『伽婢子』三三四「梅花屏風」）。○

仏種は縁よりおこる 「仏種ハ縁ヨリ起ル 是故一乗ヲ説ク」（『法華經』一「方便品」）。「仏種」は、仏になるための素質。○一味の雨 仏語。仏の教

えを、遍く降りそそぐ雨に喩えていう。○九品のうてな 九品の台。仏語。往生した者が、それぞれの位階（九品）に応じて座る、極楽浄土にある蓮の

台座。その蓮台がある浄土。○歎喜 「クワンギ Quangu」（日葡）。○正念 仏語。一心に念仏すること。

【出典】『二人比丘尼』（富士一）、『沙石集』十一「悪を縁として発心したる事」（富士二）。『二人比丘尼』は、注に示した通り「うらめしく…」の類

歌を収めているが、本話への直接的な影響は薄い。一方『沙石集』は、構成、結末、表現など、多くの点で一致し、本話の典拠といえる。ただし『沙

石集』には、大別して、写本で伝わる広本系と、流布刊本の略本系の二種がある。本話の主人公水崎忠次郎が、「もとゆひ」を「をしきる」場面は、

広本系のみに見られる。即断はできぬが、作者が参照した本は広本系か。【余説】先行作品を、構成ではそのまま取り入れ、やや独自性に欠けるか。

また、登場人物の出自に、作者が熟知していたであろう河内の国周辺の地名をあてて、話を膨らませているものの、文章に迫力が感じられない。ま

た、大和国吉野で、水崎忠次郎が「日すでに暮しかば」山本の里に宿をとめるとするには、両地は距離があり不用意といえるか。なお、構想を『三

人法師』にかりたとの指摘もある（富士1）。

○死して二人となる

*小田原城下のうらに、百姓のすみける一村あり。家中の侍も少々すみけり。*北条早雲の時に、*西岡又三郎とて*中間わづらひて死にけり。夕さり夜ふけがた野原に埋みおさめんとて、傍輩どもあつまりて日の暮るを待ける所に、見なれぬ男の来りて人々には会釈もなく、死人の前に座して声をかざりに啼ける。あはれなるまでに聞えしかば、さだめてちかき親類、又はしたしき友なるべしと思ふところに、死したる戸俄にむくとおきあがる。此人もおなじく立あがり、*搏あひ打あひけり。物をばいはず、かなたこなたせしま、あつまりし人々は太におどろきながら、すべきやうなくして戸をさしこめ出のきけり。二人とちこめられ、戸より内にて打あひつ、日の暮がたにしづまりければ、人々戸をひらくに二人おなじく枕にふしてあり。*勢のたかさ、*すがたが、り、顔の有さま、鬢、鬚、その身に着たる衣服までも、すこしも替ることなし。常に*狎たる傍輩も、いづれをそれと見知べからず。棺をおなじく二人をひとつにして、塚を築て埋みけり。

○小田原城下の 相模国小田原城（現神奈川県小田原市城山）。小田原城は明応四年（一四九五）北条早雲により攻略され、以後北条氏の関東進出の拠点となった。中世末期には、城下は武家屋敷と町人屋敷が混在していたが、近世に入り稲葉氏により整備された。「百姓のすみける一村」とは、『新編相模国風土記稿』二三に「城下町 城の東南を擁し凡十九町あり。此十九町を総て小田原宿と称す。…此外谷津村といへる村落あり。農民の住せし所にて宿駅の事に預らず。十九町一村を統て、小田原府内と称せり」とあり、谷津村（現神奈川県小田原市谷津）を指すか。なお、谷津村は小田原宿とは城を挟んで反対側に位置し、「城下のうら」とするのにも合う。

○北条早雲 戦国時代の武将。永享四年（永正十六年（一四三二）一五一九）。諸説あるが、はじめ伊勢国出身により伊勢新九郎と名乗り、出家して宗瑞。後北条氏の初代。延徳三年（一四九一）伊豆国を攻略し、韮山城（現静岡県田方郡韮山町）を築き居城とする。永正十三年（一五一六）相模国を征服。同一六年、韮山城にて没。なお、北条氏が小田原を居城とするのは、第二代氏綱から。○西岡又三郎 未詳。○中間 武士に仕えて雑務に携わる者。仲間とも。身分が侍と小者の間に位することからの称。○搏あひ 「搏ツカム」（伊京集） ○勢のたかさ 背の高さ。○すがたが、り 様子。風情。○狎たる 「狎ナル」（易林本）

【出典】『太平広記』三三九「李則」へ山口・麻生。あらずじは次の通り。唐の貞元（七八五―八〇五）の初め、河南の李則が死亡したところへ、蘇郎中と名乗る朱色の衣を着た人が現れる。この人が激しく哀慟すると、死んだはずの李則が起きあがり、互いに搏み合い殴り合う。騒ぎが静まり家人が様子を見ると、姿形、衣服までも同じ二つの屍が横たわっていた。そこで二人を同じ棺に葬った。

【類話】『曾呂利物語』三二「離魂といふ病氣の事」（富士2）。

○武庫山の女仙

*天正年中に*京都七条わたりに、*小野民部小輔とて、もとは然るべき人のすゑと聞えし、世におちぶれて、京のすまゐも物うくて、*津の国冠の里にしたしき人を頼み、かしこにくだりて住けり。さびしき田舎のすまゐ我とひとしき友もなく、春の日のうら、かなるに、いざなはれて、心にまかせて*武庫の山もとにいたり、

*見渡せばすみのえ遠しむこ山の

浦づたひして出る舟人

とうちずむじて、谷ひとつわたりて、あなたの茂みにさし入れば、年のほど甘あまりの女只ひとり立てあり。花をたづねてあそぶにもあ

らず。*妻木をひろふ*賤のめともみえず。*身には木の葉をつりながら、いやしからぬ有さま、民部あやしき思ひて近くあゆみよりつ、君はいかなる人なれば、かゝる山中に只ひとりおはすらんと問ければ、女うちえみて、我はもとより此山に年月をかさねしものなり昔をかたりて聞せまいらせん。古しへ*神功皇后は、*高麗、*もろこし、*新羅の国をうちしたがへ、此日のもとに帰陣あり。弓、矢、鉾、劍、よろひ、甲、あらゆる武具を此山にうづみ給ひしによりて、武庫の山とは名づけられけり。その、ち*天長のみかどの御時に、第二の妃この山に入給ひ、*如意輪觀音の法をおこなひ給ふ。故に如意の尼と申奉りけり。

こ、は弁才天の住所、*広田明神つねにまもり給ふ。白き龍にまじりてあらはれ、石となりて御形を残り、猶今も此山にましませり。空海和尚この所にして如意宝珠の法を修せられしに、弁才天女あらはれ給ひ、我此山にとまりて、あらゆる貧人のためにたからをあたへんとちかひ給へり。如意の尼すでに伽藍を建立し、如意輪の陀羅尼を誦し、空海和尚を請じて秘密勸頂をうけ給へり。此年天下大に日でりせしかば、*守敏空海雨ごひのいり有けるに、如意尼もとよりもち給ひし浦島子が箱を、空海これを借て、大秘法をおこなひ雨ふりて天下をうるほし給ひけり。此山の上に大なる桜木有て、朝ゆふべには光りさしてか、やきけるを、空海に仰せて、此木を伐て仏像をつくり浦島子が箱をば仏の中につくりこめ給ふ。

御后此山に入給ひし御時、二人の女官をめしつれ給ふ。一人はこれ*従四位上和氣真綱のむすめ*豊子といひ、今一人は*相馬将門のむすめ*将子といふ。今の我身これなり。如意尼につかへ奉る事、露ばかりもをこたりなし。我は常に滝の水をくみて關ヶのそなへとす。ある時滝の水のもとに、いとけなき児のいまだ二歳にもたらざるやうにて、色白くうつくしきが、*匍出て我を見て、うれしげに笑ひけるをいとおしく愛して、時のうつりて、をそく帰りしかば、いかにけふはをそかりしとがめ給ふ。かうくの事侍べりと申す。その子い

だきて帰て見せよと仰せけるを、又滝のもとにゆきければ、いたひけらしき匍出てわらひけるを、かきいだきて帰るに、門に入しかば此子むなしく成て、枯木の根のごとくにておもしろく覺えしを、如意尼近くよせて御らんじければ、幾世へたりともしらす、大なる*茯苓といふものなり。是はそのかみ聞及びし仙人の靈藥なり。これを食すれば、白昼に天にのぼるとかや、かぎりなき命をのぶる藥なり。*甌に蒸て奉れとあり。柴三束を焼つくしてす、め奉る。みづからきこしめし二人の女官にも給はり、みなのかりなく喰つくしけり。これより心はれやかに身も涼しく日をかさねて、如意尼と豊子もろ友に天に上り給ふ。我は心すこしをくれて、つれてものほり得ず。此山にとまり

*松の葉を食とし、数百年ををくりて、夏とても熱からず、冬もまた寒からず。谷峰をわたれども苦しくもなし。身はかくろく形ちをころへず。さて今はいか成君のおさめ給ふ御代成けるやと問に、民部はかゝるきどくの物がたり、又ためしなき御事なり。天長の年よりこのかた、世かはり人あらたまり、数百歳をへだつるあひだに、*人王は百七代にあたらせ給ふ。年号は今天正と改元あり。世の中乱れて暫らくも静かならず。国さはぎ、民くるしみ、上下ともにをだやかならねば、只浮雲のごとし。あな*浦山しの有さま、真の*地仙にておはしけりとて、首を地につけておがみけるあひだに、女仙を行がたなくうせにけり。

民部ふしぎに思ひ、ふもとの里に入て、只今此山中にてかゝる人に逢けり。年ごろも此人に行逢たるためしありやとたづねければ、あるじ大におどろきて、されば此家の祖父八十有余なりしが、むかしわかし時に柴刈とて山に入しかば、何とはしらず甘あまりの女の顔うるはしくつや、かなるが、身には木の葉をつりかさね、岩のうへにたちてありしを、あれはといふ声を聞て、飛ともなくはしるるともなく嶺にのぼりてうせさりぬとかたられ、きつね、むじなのばけたるにや、といはれしを聞き侍べり。それより後には見たる人も侍べらず、とぞいひける。民部きどくの事をもみつる物かなと思ひつゝけて帰りぬ。

○天正年中 一五七三―一五九一年。戦国時代。 ○京都七条わたり 七条大路の近辺。「文明以来荒廃し、僅に道路を通ずるのみ。天正年中再び開け重要な街区となる」(『京都坊目誌』五)。 ○小野民部小輔 未詳。民部小輔は、民部省で卿、大輔、権大輔、に次ぐ要職。 ○津の国冠の里 摂津国島上郡冠莊(現大阪府高槻市大冠町)。淀川の西側上流に位置する。もと莊園の名で、文禄年中の太閤検地から冠村となる。 ○武庫の山もと 摂津国武庫郡(現兵庫県神戸市東灘区)にある、現在の六甲山地の麓。武庫川沿いにあり、「冠の里」から至るとすると東麓にあたるか。ただし、「春のうら、かなるに、いざなはれて」至るにしては、両地はいささか距離がある。 ○見渡せば 類歌に「住吉のえなつにたちて見わたせば六兒のとまりをいづる舟人」(『歌枕名寄』泊四一一二)がある。 ○妻木 爪木とも。竈でもちいる木の小枝。たきぎ。 ○賤 振り仮名「じつ」は、「しづ」の誤刻。 ○身には木の葉をつゞり 仙人特有の衣装。本話挿画参照。 ○神功皇后 「神功皇后」は、第十四代仲哀天皇の後で名は氣長足姫。しばしば託宣を受け、巫女の役割も担っていた。以下の本文を五つの記事に分けると、「武庫山の由来」、「如意の尼」、「広田明神の靈驗」、「空海の雨ごとと浦島子の箱」、「如意の尼の従者」となり、右は「元亨釈書」十八「如意尼」や『本朝神社考』二「広田」、同五「浦島子」に載る。先行作品と本文との関わりについて述べると、本章の「如意の尼」では天長帝の「第二の妃」とするが、『神社考』二「広田」では「天長ノ妃」とのみ、同五「浦島子」では「第四ノ妃」、また『元亨釈書』では冒頭「天長帝ノ次ギノ妃」と記すのに対し、後出帝が得る靈夢の中では「大悲ノ真身ヲ見ト欲バ第四ノ妃即是也」と記し、同一記事内で「第二」と「第四」が混在する。いずれにせよ「第二」とするのは、管見の範囲では本書と『元亨釈書』冒頭部だけである。次に「空海の雨ごとと浦島子の箱」の記事は、日照りのあつた年を本文では「此年天下に大に日なり」とし、如意尼が空海を招き秘密灌頂を受けた年と同じとするが、『元亨釈書』及び『神社考』五では日照りがあつたのは「天長元年」、秘密灌頂を受けたのが「天長七年」とする。上記齟齬は、『元亨釈書』のいくつかのエピソードを、本書が順序を変えて利用したために起きたものか。ちなみに、本章前半を占める一連の記事が

先行作品と明らかに異なる点は、例えば伽藍建立の年や秘密灌頂を受けた年などで、具体的な時間を示していないことである。次に「如意の尼の従者」について、女官が二人いることは『元亨釈書』に見られ、それぞれ「如一」、「如円」と記される。このうち「真綱之女」は本文に合うものの、上記の通り、名は「如一」で本文の「豊子」とは合致しない。またもう一人を「将門のむすめ将子」とする記事もない。ただし、将門の娘は、「如藏尼」として知られ、『元亨釈書』では「如意尼」の次に「如藏尼」の伝説を収載している。なお、「如一」、「如円」の記事は『神社考』には見えない。以上ここに述べた以外の、「武庫山の由来」、「広田明神の靈驗」、「空海の雨ごとと浦島子の箱」の描写は先行作品をほぼ忠実に採用する。 ○高麗 高句麗。古代朝鮮半島北方部にあつた国名。 ○もちこし 唐土。中国大陸。 ○新羅 古代朝鮮半島南東部にあつた国名。 ○天長のみかど 第五十三代淳和天皇。在位は弘仁十四年―天長十年(八三三―八三三)。桓武天皇の第三皇子。 ○如意輪觀音の法罪障を消すために、如意輪觀音を本尊として行つ修法。如意輪觀音は一切の願いを成就させるという如意宝珠や宝輪などを持ち、多くは六臂を備え、右膝立ちの姿をしている(『仏像図彙』二)。 ○広田明神 摂津国武庫郡(現兵庫県西宮市大社町)にあり、天照大神の荒魂を主神として祭る神社。二十二社の一つ。平安期には、祈禱により官位が上がるという信仰があり、貴族の参拝が盛んであつた。また、平安後期には社頭で歌合が催され、和歌に靈驗のあることでも知られた。 ○守敏 出自は不明。南都三論宗の僧、勤操に従い仏法を学び、弘仁十四年(八三三)帝から西寺を賜つたという(『本朝高僧伝』「京兆西寺沙門守敏伝」)。ちなみに、勤操ははじめ大安寺に入り、のち吉野山で修行した僧都で、若き日の空海に戒を授けたといわれる(三一七注「岩淵の勤操僧正」参照)。なお、空海との雨ごいの一件は『神社考』六「神泉苑」に詳しい。 ○従四位上和氣真綱 和氣清麻呂の子。延暦二年―承和十三年(七八三―八四六)。幼くして文章生となり各省の要職を歴任。この間、兄広世とともに神護寺を建立し、最澄、空海の庇護者ともなった。「真綱」二代宇佐使 従四上参木(『和氣氏系図』)。 ○豊子 未詳。 ○相馬将門 平将門。平安中期の武将。?―天慶三年(?―九四〇)。はじめ相馬小次郎と

称し、藤原忠平に仕えた。のち下総に勢力を拡大させるも、天慶二年（九三九）将門の乱を起こし、翌年敗死。○将子 未詳。如蔵尼がこれにあたる

か「如蔵尼ハ平将門第三之女也」（『元亨釈書』十八「如蔵尼」）。なお、和氣真綱と平将門の生存年には、約百年の開きがあり、それぞれの娘が同時に「めしつれ」られたとは考えにくい。○匍出て 「匍 匍 ハフ」（文明本）当

該箇所は「匍」、後出は「匍」を用いる。○茯苓 アカマツ・クロマツの根

に寄生する、サルノコシカケ科のきのこの一。仙人の食する物として有名。「茯

苓 松ノ神靈ノ氣ガ伏結シテ成ル故ニ、之ヲ伏靈、伏神と謂フ也」、「服サバ

魂ヲ安ジ、神ヲ養ヒ、飢エズ、年ヲ延ブ」（『本草綱目』三七）。○甑 米や

豆を蒸すための器。○松の葉を食とし 「松葉」は仙人の食物。「松葉 毛

髮ヲ生ジ、五蔵ヲ安ジ、中ヲ守リ、飢エズ、年ヲ延ブ」（『本草綱目』三七）。

○人王は百七代 第百七代正親町天皇。在位は弘治三年（天正十三年（一五

五七）一五八六）。○浦山し 「浦山敷 ウラヤマシ 俗字」（書言字考）。

○地仙 地上で暮らしている仙人。道教では、天上に住む天仙に対して下位

の仙人とされる。

【出典】『元亨釈書』十八「如意尼」、「太平広記」六四「楊正見」（富士2）。

注（神功皇后）で述べたように、本話前半はほとんどが『元亨釈書』の記

事に拠っている。本話後半も「楊正見」の話をほぼ抜いている。あらずじ

は次の通り。

唐の開元（七一三〜七四二）年中の事。楊正見は眉州（現四川省眉山県）

の楊龍の娘で、幼時から賢く優しい子であった。ある時、異界に迷い込み、

ある女冠に出会う。女冠に仕えて数年の後、いつものように泉で水を汲み

帰る途中、色白の小児と会い帰りが遅れてしまう。女冠に訳を話すと、次

にその子に会ったら抱いて連れ帰れといわれる。ある時、この小児を抱い

て帰ると、小児は茯苓に姿を変えていた。これを柴三束を用い、甑で蒸し

食すと、白日に昇天するという。開元二十二年、正見はこれを食し昇天した。

【余説】本話は、前半と後半をふたつの先行作品によりかかる形で成ってい

る。前半は『元亨釈書』十八「如意尼」を使って作られる。登場人物で一

話としての統一を図るものの、話がふたつに分離しているのは明らかで、

どちらに重きをおいたのかは読みとれない。なお、了意は「伽婢子」三一

四「梅花屏風」で、如意の尼の話を利用している。

仙境譚を利用して時連意識を語ったのが「伽婢子」であったとすると、

手法は似ているが、本話では時連意識を語ろうとする態度はさほどなく、

話の展開あるいは先行作品の消化に意識が向いてしまっているようにも思

われる。

○*原隼人佐*謫仙

*原加賀守は*武田譜代の家臣、世にかくれなき*武勇の侍大將な

り。*秋山伯耆守が妹を妻としてそひけるに、久しく子といふ者もな

かりしに、ある時たゞならずわづらひ出しけるを、医師を頼て、さま

くにくれうぢすれどもしるしなし。ある人來りて、是は正しく懷妊な

り。さのみに薬をあたふるに及ばずといひければ、さてはめでたき事

なりとて、月のみつるを待ちけるに、すでに十月に成ども子も生まれ

ず。やまひいよくおもくなり、十六月にあたりて、母つゐにはかな

くなりたり。*惠林寺におくりて、塚の主とぞなしける。

其夜しも月あか、りけるに、塚の内に小児のなく聞えしかば、寺僧

あやしみて塚をひらきければ、うつくしき子の今生れて、母のかばね

にすがりつきて啼けるを、父のもとへいひつかはしければ、いそぎ迎

へとり、乳母めのとをつけて*生立しに、たくましく生たち、程なく

成人して、*器量こつがら人なみなならず、心ねしぶとく*利根なり。

*年十五より初陣して、度々の軍に手がらをあらはしければ、信玄も

秘蔵のものにぞ思はれける。

*ある時信玄仰せけるは、汝が父加賀守は、前代從五位下左京大

夫信虎公の時より、武勇のほまれ忠節のはたらき、武田譜代の侍にて、

かたぐ心やすく思ふなり。その子として、父が*余蔭に靠かかりて、

自分のほたらきにをこたることなかれ。武道の*功者に近づきて、よ

き事を聞習ふべし。智恵ありとも聞事少ければ、物知事博からず。その上には国法よく守るべし。国法軍法をそむくものは、臆病不忠の科人なり。主君の御影にて、命をつなぎ妻子をはぐくみ、心やすく身をたてながら、某家の法をそむき、御恩をほうずる心ざしを忘れ、わたくしの遺恨をもつて身命をうちはたすは、主君の御用にもたず。只国家の盗人ならずや。かゝる不覚人は生てあれども義理をしらず恥をしらぬ故に、*大事の虎口をにげくづして、味方の負をさすものなり。先祖親祖父はたとひよしとて、子孫かならずよかるべきにはあらず。自分の行跡よき慚なくば、世に名は聞ゆべからず。隼人佐は、父にはことの外にすぐれてみゆ。兎に角に心を正直に、家をおさめ百姓をあわれみ、忠節を宗とすべしとぞの給ひける。然るに隼人佐は、武勇才智遠慮分別首尾さうおうのもの、ふ也。こと更に自門他家に比類なき一能あり。父はもと*甲斐国高島といふ所の人なり。武篇に名だかく、*方向の陣どりを得ものにて、*楽のたうといふ事を仕いだし、たびく勝利をあらはせり。子息隼人佐にむかひ、それ侍は何にても、弓やの道にひとつの得ものあるやうに、つとめてたしなむべしといひおきけり。さればにや隼人佐は他国にゆきても、たつ木もしらぬ山中の道、いまだふみぬ所をも見つもりしてふみわくる事、*陣どり合戦の場、山河のあひだ、更にその国の案内者をからず隼人がよきと申すは、諸卒大小上下心よくうたがひなく、みなしたがひゆくたがふ所なし。

*昔平家の一門都を落て、津国一の谷の城にこもりし時、九郎義経責くたり、鶴越におもむき、此山中に案内知たるものやあるとの給ひしかば、武蔵国の住人平山の武者所す、み出で、*季重よく在知候と申す。*土肥*畠山とりぐに、武蔵国の人はじめて此山をとをり、津の国播磨のさかひなる山の案内、いかでか知べきと笑ひしに、平山いふやう、鹿のつく山は狛師がしり、鳥のつく野は鷹師がしり、魚のよる浦は漁のしる。芳野泊瀬の花の色、須磨やかしの月影は、その里人はしらねども、数奇ものは知らひなり。色をも香をも知人

ぞしるといへり。桃李ものいはず、下をのづから蹊をなすとかや。敵をまねく城のうち、軍をこめたる山中には、剛のものこそ案内者よとて、鞭をあげて先陣にす、みけりといへり。其道に心をいれてよく工夫いたさば、などかいたらざらん。いにしへもろこし胡国の路に、*管仲が老馬を先に立て帰りしは、ためしなき事にもあらず。

*天正八年かのえ辰九月下旬に武田四郎勝頼東上野に出て巡見せられけるに、太湖山地延の城より仕かけたる軍に、武田方*徒膚にて戦かひ、城はのりとりけれども、人数はおほくうたれたり。中にも侍大将原隼人佐は、城兵七八人にむかふてた、かひしに、小溝に足をふみいれ、頂より眉間をかけて切つけられ、深手なりければ打たれしを、*曲淵庄左衛門肩に引かけ、城外に出て郎等にわたし、甲府に帰りてやがて死けりと世には沙汰ありけれども、まことには隼人佐心にくやむ事あり、武田の家*長篠の後をとりしよりこのかた、家老諸侍みな死うせて、隼人佐わづかに只独り生残り、*長坂釣閑、*跡部大炊両人が*倭奸に押れて、武田の家運すゑになりし有さま、禍ちかきにある事を知て、速く*范蠡がいにしへを思ひ、*張良がむかしをしたふて、山ふかくわけ入つ、仙術の道を尋ね、長生の方をもとめ、つゝるに大仙に逢て、そのおこなひを習ひ、白昼に天にのぼる。其のち、山人に行あふて、武田の家のはろぼされし事を聞て、うれへたる色ふかく、我はそのかみ原隼人佐昌勝といはれしものなり。本は天上にありけるを、少あやまることありて下界に流され、武田の家にしばらく身をかくして居たりしを、罪ゆるされて天上に帰りしなりとて、足もとより雲をおこし、あまつ空にのぼるとみえし、隠々としてうせにけり。

○原隼人佐 原昌俊の男、昌勝。「原隼人佐、組衆五十騎、手まへ七十騎、あわせて百廿騎の侍大将なり。御本陣のとばりに陣取、御陣かへるときは、夜中に出、御はたもとをはじめたてまつり惣軍の陣場奉行、原隼人佐也」(「甲陽軍鑑末書」とある。 ○謫仙 天上から人間世界に流された仙人。謫仙人。

○原加賀守 原昌俊。「原加賀守、是ハ甲州たかばたけの人也。是も弓矢のかうしや、萩原常陸におとらぬ仁也」(『甲陽軍鑑』品四三)。また、『甲斐国志』九六、人物部加賀守の項は「伽婢子」五一四「原隼人佐鬼胎」の後半部が流用されているか。○武田譜代の家臣 武田氏に代々仕えた家臣。『甲陽軍鑑』品十七「甲州武田法性院信玄公御代惣人数事」に「御普代家老衆」として、秋山伯爵守、原隼人佐、小山田備中、跡部大炊助らの名が見える。○武勇既出。一一三「富士垢離」の項参照。○秋山伯爵守 秋山信友。武田信玄の侍大将。享祿二年(天正三年(一五三二)一七五)。○惠林寺にをくりて、塚の主とぞなしける 惠林寺は、甲斐国山梨郡小屋敷(現山梨県塩山市小屋敷)にある臨済宗妙心寺派の寺。応仁の乱の後衰微したが、武田信玄によって再興され菩提寺となった。『伽婢子』五一四「原隼人佐鬼胎」では、隼人佐の母は「法城寺のうしろに埋みて、塚の主となしけり」とある。また『甲斐国志』九六に「加賀守法名ハ蓮朝ト云フ、八代郡小石和二蓮朝寺ヲ建ツ」とあり、原家の実際の菩提寺は蓮朝寺である。○生立 「生立 ソダツル」(弘治本)。○器量いづから 持つて生れた力量と体格。[Quintessence] 優雅なこと。よい性質、またはよい体つき」(日葡)。○利根 生れつき利発なこと。○年十五より初陣して 前出「原隼人佐鬼胎」には原隼人佐の初陣は「十八歳」とある。○ある時信玄仰せけるは……かたぐ心やすく思ふなり 「甲陽軍鑑」品三十「晴信公、原隼人助をめしておほせらる、其方父原加賀守は、信虎より我等まで、度々のちうせつ・ちうかうあるからうなり。しかも、代をかぎらぬ武田の譜代なれば、かたがた以、心安事也」とある。○余蔭に靠かかり (父の)あとに残された恩恵によりかかり。○功者 技芸などの分野において、多年修行・研鑽を積んだ経験のあるすぐれた人。○不覺人 卑怯者。臆病者。○大事の虎口 命にかかわる決定的な局面にあつて、きわめて危険なことやそのような場所。○甲斐国高島 甲斐国巨摩郡中郡筋高島村(現甲府市高島町)。○方向の陣どり 「かうよう」は「ほうよう」の誤刻。陣法の一つ。敵が鋒矢の備えで突進してくるとき、これを包んで討つか、左右に外すための備え。「向」の字は明暦二年版『甲陽軍鑑』品四三などに見られる。○楽のたう 陣所に設けた小屋。見張りの番人を置

くところ。「楽堂 ガクノドウ 陣営二用フル所。禁庭建ツル所ノ幄屋之制ニ準拠ス」(書言字考)。○陣どり合戦の場、山河のあひだ……しがたひゆくにたがふ所なし このあたりの記述は『甲陽軍鑑』品十七「原隼人佐は、敵の国ふかく御働の時は、一入後備へに被成候。子細は、陣取の場所見合する事、御家中の諸大將衆にすぐれたり。他国にて山中など、道のしれざる所をも、此隼人佐見積り、道をふみ分くる事、前代より今にいたるまで、武田の家にも此の人一人也。去程に、陣取の場所、合戦の場所、山河の案内なき所を、原隼人よきと被申れば、諸人上下・大小共に、心よく存る也」による。○昔平家の一門都を落て津国一の谷の城にこもりし時 以下の記述は『平家物語』九「老馬」:「……この山の案内者あるらんとめんんに申しければ、武藏国住人平山武者所す、み出て申しけるは、季重こそ案内は知りて候へ。御曹司、わどのは東国そだちのものの、けふはじめてみる西国の山の案内者大にまことしからずとの給へば、平山かさねて申しけるは、御ぢやうとおおはえ候はぬものかな。吉野・泊瀬の花をば歌人がしり、敵のこもつたる城のうしろの案内をば、剛のものがしる候」による。○季重 日奉季重(日奉氏は武藏七党の一)。生没年未詳。武藏国多摩郡平山を本拠とし、院武者所に伺候したため平山武者所と称する。○土肥 平実平。? 建久二年(一一九二)。相模国足下郡土肥郷を本拠として土肥次郎と称する。頼朝の厚い信任をうけていたが、元暦元年(一一八四)の一ノ谷合戦では義経の麾下にあり、鶴越えの奇襲作戦に参画した。○畠山 平重忠。長寛二年(元久二年(一一六四)一二〇五)。武藏国男衾郡畠山莊を本拠とする畠山莊司重能の嫡子。宇治川の合戦や一ノ谷の合戦で活躍した。○管仲が老馬 『蒙求』「管仲随馬」の故事「管仲・隰朋、桓公に従つて孤竹を伐つ。春往いて冬返り、迷惑して道を失ふ。管仲曰く、老馬の智用ふべきなりと。すなはち老馬を放つて之に随ひ、遂に道を得たり」をさす。○天正八年かのえ辰九月下旬「天正八年九月……原隼人佐と申す侍大将は、我が備にて一番に乗こみ、かうべにかたなきず、ふかでおひ、帰陣ありて、やがて甲府にて死去なり」(『甲陽軍鑑』品五六)とある。しかし隼人佐が没したのは、天正三年(一五七五)の長篠の戦いであるとする説もあり、本作は歴史的背景を『甲陽軍鑑』に求

め、天正八年（一五八〇）を没年としている。また、『関八州古戦録』十一「武田勝頼乗捕上州善ノ城事」にある隼人佐最期の場面は「狗張子」の記事によったものか。○徒膚 甲冑を身につけないこと。○曲淵庄左衛門 曲淵助之丞吉重。「曲淵」と云ふ地名は本郡中郡筋にあり、軍鑑に云ふ曲淵庄左衛門は初め鳥若と云ふ板垣信方の僕なり。挙げて同心となし、後は山県氏に属し勇功世に顕はれたり」（『甲斐国志』百十二）。○長篠の後 天正三（一五七五）年の長篠の戦いで、武田軍は信長・家康連合軍に敗退し、多くの名ある部将を失うなど壊滅的な打撃を受けたことを指す。これ以後武田家は衰退した。

○長坂釣閑 長坂光堅。？天正十年（？一五八二）。左衛門尉・長閑齋。甲斐武田氏の重臣、とくに勝頼の代に重用された。天正三年（一五七五）の長篠の合戦では、跡部大炊助とともに勝頼に進撃をすすめて敗戦を招いた。○跡部大炊 跡部勝資。？天正十年（？一五八二）。大炊助・尾張守。武田信玄・勝頼に仕え譜代家老衆三百騎持。○倭奸 既出。「富士垢離」の項参照。○范蠡 春秋時代の越の功臣。会稽の恥を雪ぎ、呉王夫差を破って上將軍となった。のち、官を辞して商人となり、斉の宰相に任ぜられるも、全財産を与えて陶に去ったという。（『史記』一二九）○張良 前漢の功臣。字は子房。蕭何・韓信とともに劉邦を助け、高祖が即位するに及び、留侯に報ぜられた。晩年、神仙術を学んだという（『史記』五五）。

【余説】「伽婢子」五一四「原隼人佐鬼胎」の冒頭は「甲州武田信玄の家臣原隼人佐昌勝は、加賀守昌俊が子なり」とあり、前作で「鬼胎」によって誕生した「昌勝」は、つづく「狗張子」の該話ラストで「謫仙」されていたことがわかる。それによって「かの男子は原隼人佐なり。十八歳にて初陣せしより、よろづ神に通ぜし如く、奇特の事多かりしも、子細あることなり」という、「原隼人佐鬼胎」での謎も解けるという趣向である。このように、明らかに「伽婢子」の続編として書かれているが、本作では明暦二年版『甲陽軍鑑』の記事から流用していると思われる部分が多く見られる。つまり「伽婢子」で異常出生した主人公の造形を『甲陽軍鑑』の記事によって補い、仙人譚として膨らませた作品と言える。

【出典】『善悪因果経鼓吹』十三「三」塚中兒飲母乳、「甲陽軍鑑」品三十、

四三（富士2）。

【類話】「伽婢子」五一四「原隼人佐鬼胎」、「奇異雑談集」四一五「国阿上人発心由来の事」（富士2）。出典に掲げた『善悪因果経鼓吹』を含め、いずれも母親が出産前に死亡し、その葬られた土中から出生する類の話である。

○形見の山吹

都の南^{みなみ}＊泉河^{いづみかは}のあたりに菅野喜内^{すがのきない}とて色このみける人あり。＊文禄^{ぶんろく}年中の事にや、春もすゑになりゆけば、あだにちりゆく花の名ごり、いづくにか又のこれる木ずゑもありやなしやと、あらぬ太山^{みやま}を思ひ＊青葉^{あはば}まじりの遅桜^{おそざくら}もあらましかば、初花^{はつはな}よりも猶めづらかならんものをと、すみかをうかれ出て＊瓶^{びん}の原＊鹿瀬山^{かさせ}をうち過る。

＊都出てけふみかの原泉河^{はらいづみかは}

川風さむし衣かせ山^{やま}

と古き歌まで思ひつゝけて＊木津^{きづ}の里に行かゝる。

年のほど十七八とおほしき女の、すだれの間よりさしのぞきける顔ばせ、＊むかし女三の宮、手がひの猫^{ねこ}のつなにひかれて、御簾^{みすだれ}のかけよりのぞき給ひ、かしは木の衛門^{ゑもん}もはつかに見そめまいらせける、たがひの心ぞかよひけるためしもなくこそありつらめ。家居もさすがに故ある人のすみわたりぬらん、軒端^{のきば}は物ふりたりけれどもいやしからぬ有さま、喜内はこれを見そめしより、心乱れたましるうかれ、近きあたりに立^{たち}よりて、あの軒ばふりたる家は誰^{たれ}人の住ける所ぞとへば、＊大内義隆^{おほのちよなたか}の＊宰人^{さうにん}高梨三郎左衛門とて、今は身まかりて後家と娘と只二人、めのわらはをめしつかふて、かすかなるすまゐ御いとおしく侍べるとかたる。喜内聞て、娘の名をとへば、＊弥子^{やこ}と申て今年は十八なりといふ。喜内はたへかねて、何をかつ、むべき。かりそめに見そめしおもかげ、我身をはなれず思みだれ侍べり。せめて此事を露ばかりしらせてたべ。しからば何事の御をんといふとも、これにはま

さらじといひければ、あるじの妻、もとは京の人なるが、情ふかく頼まれ、御文まいらせ給へ。とゞけて奉らんといふに、喜内うれしさかぎりもなく、肌に着たる白き小袖の衣裏をときて書をくりけるに、中々こと葉はなくて

*君にかく恋そめしがとしらせばや

心に忍ぶもちずりの跡

その夕暮、あるじの妻行て物がたりすとて、ひそかに文をわたしけり。弥子たもとにいてねや入つ、此哥をみるに、*荻の葉につたふ風のたより、萱草のすゑいかならん、露のかごとにいひしらぬ文も恥かしさをいかゞせんと、いと物わびしくあはれるかたにおほえけれども、ふきもさだめぬうら風に、なびきはつべき煙のすゑも、つるにはうき名にたつべしと、心づよきを閑守になして過ゆく程に、喜内は宿に帰りながら、いつとなく、ねもせで夜をあかし、おきもせで目をくらし、返しありやと待けれども、よどむや水のいなせ川、いなせの返しもなかりしを、あるじの妻ひそかにゆきて、御返しはいかにと責ければ、弥子恥かしながら

*あまのたく浦の塩やの夕煙

思ひきゆともなびかましやは

といひければ、かうくつれなくおはすといひつかはしければ、喜内いよくこがれまどひて

*恋しなば煙をせめてあまのすむ

里のしるべと思ひだにしれ

今はこの世のかぎり、たとひむなしくなりゆくとも、心は君があたりをたちはなれじなんど、おそろしきまでかきくどきて

*面影はほのみし宿にさき立て

こたへぬ風の松にふく声

只つれなき御心に思ひなげかれて、*音にたて、なく虫のたとへまていひしらぬ文の数千束にあまる程に成ければ、弥子もあはれとおもふなさけの色深くうちしほれて、*親しきけずは*あづまぢや佐野の

ふなばし、さのみやは堪ては人の恋わたるべきと思ひしづめる有さまなり。

さて、かくぞよみける。

*世々かけて契るまでこそかたからめ

命のうちにかはらずもがな

とかきてつかはしければ、喜内この歌を見て*限りなくよろこび、その夜をさだめて、あるじの妻に案内せさせ、垣のひまより忍び入て障子をひらきければ、一間なる所にともし火かすかに、おもはゆくうちそばみ居たるに、かたらひよりて、日ごろの物おもひ心をくだけける事より、行すゑまでの契りをかたるに、弥子はこと葉すくなう聞えて

*ことの葉は只情にもありなまし

みえぬ心のおくはしられず

とかこちけり。喜内ふかく恨みて

*あひそめし後の心を神もしれ

ひくしも縄の絶じとぞ思ふ

かりそめになれにし後は、人め忍ぶの露を分て行通ひしに、はかなき世よのならひ、弥子が母、わづらひ出してむなく成たり。悲しさいふばかりなくうちこもりけるに、霜に枯行草の上に雪ふりかさなるとかや。*喜内が父は尼が崎にありけるを、*関白秀次公にめされておもむくとて、喜内をよびよせもろ友に行たり。*幾ほどなく秀次公は高野山にして生害せられ給ふ。この*ぞめきに木津の里の音づれもうちたえしかば

*我やうき人やはつらき中川の

水の流れも絶はてにけり

かく思ひつゝくるうちに年もくれ、春過夏もたちける程に、物思ひのかさなる故にや、弥子いつとなく心ちわづらひて、つあにはかなく成たり。今は此世の名ごりも頼みすくなく成し所へ、喜内のかたよりとて、文おこせたり。かなたこなた露隙もなき事ども、さまくかき

つゞけて

*関守のうちはぬるほど、わびし夜も

今はへだつる恨とやなる

といひつかはしけるを、弥子ふしながら、涙と、もによみて

*ふみ、ても恨ぞふかき浜千鳥

跡はかひなく残る夢の世

とよみて、そのまゝ、絶入てつるにむなく成たり。あたりの人、痛はしがりて、近き野べに埋て塚の主とぞなしたる。すみあらしたる家なりければ、はしらもかたふき軒もりて浅ましきぐれ屋となり果けり。かくて三とせの春秋ををくりむかへて、喜内は泉川に立帰り、あるじの妻は、いかにと尋ねしに、此ほど身まかり侍べりといふ。弥子が家にゆきてみれば、軒ぐれ柱たをれ草のみおひしげり、すみける人の跡もなし。あたりに立よりて問ければ、日比の有さま、残りなく語るに、あまりのかなしさに、そのすみ一間のくづれたる壁を引のけしに、棹にかけたる黄染の小袖の、竿にかけながら、地におちて朽たる跡より*山吹の生出て、恨みがほなる花の色の、ところ／＼に咲たるを見るに、朽てももとのいろをわすれぬ形見の花とおはれて、喜内はいと悲しく、血の涙を流して啼けれども、*くちなし色の花の名ごりはこたふるこゑもなし。さてもなき世のありさま、かくぞ思ひつゞける。

*山吹の花こそいはぬ色ならめ

もとの籬をなく／＼ぞとふ

猶も心のをき所なく墓にまうで、見めぐれば、人の通ふ道とおほえず、山かげなれば日すでに暮かゝるに、*野寺の鐘*入相の声も心ほそく、もえ出る草葉も袖も露しげく、吹をくる風も身にしみて、涙ともろ友に念仏申して

*埋もれしその面影はありながら

塚には草のはや茂りぬる

かゝる世の中のあだにはかなきを、今もし思ひこりずは、又いつの

時をか待べき。世にしたがへば望みあり、かなはねばうらみあり。かりの色にまどひて、執心ふかく思ひみだれては、中々輪廻の妄念なるべし。そむきておこなはゞ、恋しかるべき弥子にも、*来世にはさりともしひとつはちすの縁をむすぶも頼みありと、宿に帰りて家の柱に

*なげきつむちから車のわが身世を

たちめぐるべき心ちこそせね

とかきつけて、朝とく出るとみえし。遁世してゆきかたなくうせにけり。

終

○泉河 京都府南部を流れる木津川の古称。「泉川 是即チ木津川ノ別名ナリ」『山州名跡志』十六。

○青葉まじりの遅桜も 「青葉がくれの遅桜初花よりもめづらかに」(謡曲「大原御幸」)。

○瓶の原 「三日ノ原」「三香ノ原」「御香原」「麴原」とも。木津川の右岸、鷲峰山系三上山の南麓。山城国相楽郡(現京都府相楽郡)のうち。

近世では相楽郡のうちの広域地名で、『山州名跡志』十六には「瓶原八総名ニシテ中ニ別郷有リ。西村、川原村、岡崎、井平尾、東村、登大路、仏生寺、口畑、奥畑是ナリ」とある。

○鹿瀬山 木津川左岸の丘陵地。山城国相楽郡木津郷(現京都府相楽郡)のうち。

○都出て 『古今和歌集』羣旅歌。『歌枕名寄』『類字名所和歌集』等所収。

○木津の里 木津川屈曲部の左岸。東部は丘陵地、西部は平坦地を形成し、奈良街道沿いに集落をなす。『山州名跡志』十六に「南都東大寺大仏殿建立ノトキ、諸国ヨリ運送スル所ノ材木、此川ニ著テ以テ号クル所ナリ」とあるように、木津川舟運の拠点で、奈良街道の街道集落として栄えた。

○むかし女三の宮手がひの猫のつなにひかれて 『源氏物語』若菜上。(源氏四十一歳の)三月末、柏木は六条院で夕霧らと蹴鞠に興ずるうち、猫のいたずらで捲りあげられた御簾の隙間から女三の宮を垣間見て、想いを募らせた。

○大内義隆 永正四年(天文二十年(二五〇七—一五五二))。戦国時代の武将。周防・長門・豊前等の中国地方を基盤とした守護大名。天文二十年、重臣陶晴賢の叛乱により、長門国大津郡

深川（現山口県長門市）大寧寺にて自刃した。四十五歳。詳細は卷三一五「大内義隆の歌」注参照。なお、本話の設定の文禄年間（一五九二―九六）は、義隆没後四十余年ということになる。

○空人 仕官していない武士。主家を去り俸禄を失った者。「空人 ラウニン」（『増補下学集』）。

○弥子 『伽婢子』三―三「牡丹灯籠」に登場する「弥子」を意識したものか。

○君にかく 類歌「君にかくみだれそめぬとしらせばや心のうちに忍ぶもぢずり」（『続拾遺和歌集』恋歌二）。

○和歌題林愚抄 『明題和歌全集』『歌枕』『類字名所』等所収。

○萩の葉につたふ風のたより 以下「心づよきを関守になして過ゆく程に」まで、「萩ノ葉ニ伝フ便ニ付ケ、萱ノ末葉ニ結ブ露ノカゴトニ寄セテハ、イヒシヲ又御文ノ数、千束ニ余ル程ニ成ニケリ。女モ最物ワビシウ哀ナル方ニ覚ヘケレドモ、吹モ定ヌ浦風ニ靡キハツベキ烟ノ末モ、終ニハウキ名ニ立ヌベシト、心強キ気色ヲノミ関守ニナシテ」（『太平記』十五「賀茂神主改補事」）の行文に拠る。

○あまのたく 類歌「あまのたく浦のしはやの夕煙思ひきゆとも人にしらるな」（『新後撰和歌集』恋歌二）。

○面影は 類歌「おも影はをしへし宿にささだちてこたへぬ風の松にふく声」（『定家卿百番自歌合』五十五番右）。

○新後撰和歌集 恋歌三。『題林』『明題』等所収。

○音にたてゝてなく虫のたとへ 「ねにたてて虫も鳴くなり身ひとつのうき世を月にかこつと思へば」（『新葉和歌集』秋歌下、また「声たてて鳴くむしよりもをみなえしいはぬ色こそ身にはしみけれ」（『夫木和歌抄』秋部二）等を意識したものか。

○親しきはずは 親さえ避けなければの意。本話では文意が通じない。

○あづまぢや 「オヤシサケズバ、東路ノ佐野ノ船橋サノミヤハ、堪テハ人ノ恋渡ルベキト」（『太平記』十五「賀茂神主改補事」）。

○「親しきはずは」の詞章は「東路の佐野の舟橋取り放し親は避くれど我は離かるがへ」（謡曲「舟橋」）等に見える。

○世々かけて 類歌「世々かけて契りしまではかたくとも命のうちにかはらずもがな」（『新拾遺和歌集』恋歌四）。

○「題林」「明題」所収。

○限りなし 振り仮名「かぎり」は原文のまま。

○ことのは 葉は 類歌「ことのは、たゞなさけにもちぎるらん見えぬ心のおくぞゆかしき」（『玉葉和歌集』恋歌二）。

○「題林」「明題」所収。

○あひ

そめし 類歌「うれしくはのちの心を神もきけひくしめなはのたへじとぞおもふ」（『千載和歌集』恋歌二）。

○「題林」「明題」等所収。

○喜内が父は尼が崎にありけるを 「尼崎」既出。卷一五「島村蟹」参照。

○「太閤記」十七「御切腹之事」には「五番秀次公生年十八才正宗之脇差を以、御心しづかに見えて曳々と声し給ひつつ、はやうてよと被し仰せしかば、浪遊兼光と云御腰物を以、御介錯いと神妙なり。即淡路守（注：省部重政）も兼て拝領せし国次を以、自害し、介錯は吉兵衛にうたれにけり。此雀部は摂州尼崎之住人、信は倫を離れ、勇は類を絶せしが」と記されるのだが、省部重政は秀次の家臣。高野山で秀次を介錯した後、殉じて自害する。本話で喜内の父が尼崎に在したと、秀次に招喚されたことと関連するか。

○関白秀次公 永禄十一年（文禄四年）（一五六八―一五九五）。安土桃山時代の武将。秀吉の甥。永禄十九年、秀吉から関白職を譲られ、聚楽第へ入った。文禄二年（一五九三）、秀吉に実子秀頼が誕生すると、関係が悪化し、同四年七月、秀次は謀反の疑いで関白・左大臣の職を解任された。わずかの従者とともに高野山に蟄居を命ぜられ、十五日切腹させられた。二十八歳。

○幾ほどなく秀次公は高野山にして生害せられ給ふ 秀次が高野山で自刃したのは文禄四年（一五九五）。本話の設定時間と合致する。

○そめき さわぎ。○我やうき 類歌「我やうき人やうき人やはつらきもろ共にうらむる中ぞとをさかり行く」（『題林』恋部二）。

○「題林」所収。

○関守の 類歌「関守のうちの程と待ちしよも今はへだつる中の通路」（『新後撰和歌集』恋歌四）。

○「題林」「明題」等所収。

○ふみゝても 類歌「ふみゝてもうらみぞふかきはま千鳥まれになり行く跡のつらさは」（『新後撰和歌集』恋歌三）。

○「題林」「明題」（第五句「あとのつらさに」）等所収。

○山吹 バラ科の落葉低木。各地の山野に生え、春、黄金色の五弁花を一個ずつ開く。「求法高僧伝」云書二、鷲峯山ニ春半ニ、黄ナル花開草アリ。大サ手ノ指許リ、其ノ子同黄也。名ヲハ春女花ト云。然レバ世ニ山吹ト云ハ。此春女花ニゾ当ルト云々」（『塵添鑑囊鈔』九一十六）。

○くちなし色 「梔子色」。やや赤みを帯びた濃い黄色。山吹色。くちなしは「口無し」の意から、返答のない状態に用いられる。

○山吹の 類歌「山吹の花

こそいはぬ色ならめもとの鐘をとふ人もがな」(『続千載和歌集』春歌下)。『題林』『明題』等所収。○野寺の鐘 (山寺に對して) 野中にある寺。○入相の聲 「入相」は太陽の沈む頃。また「入相の鐘」の略。日没のとき寺院で勤行の合図に鳴らす鐘。○埋もれし 典拠未詳。○来世にはさりとともひとつはちすの縁をむすぶ 極楽で同じ蓮の花の上に生まれること。結びの常套句。○なげきつむ 類歌「なげきつむ力車のわをよはみ立めぐるべき心ちこそせね」(『新千載和歌集』雜歌下)。『題林』『明題』等所収。

【出典】『牡丹灯記』(『剪燈新話』二)。太刀川清「牡丹灯記の系譜」(五)(一)「牡丹灯記の活用」、勉誠社、平成10・3。喬生符女の逢瀬の利用を指摘する。

『太平記』十五「賀茂神主改補事」。土屋順子「『狗張子』考」卷二一五「形見の山吹」を中心に(『大妻国文』30、平成11・3)。

注でも述べた通り、詞章は『太平記』十五「賀茂神主改補事」の行文に拠る。また「親しませずは」の語に注目すると、本話では不必要な文言で「あづまぢや」の歌を引用する際の不用意な転写と推され、如上からも文言の全面的な利用がうかがえる。中国志怪小説等の利用を主とする『伽婢子』とは、素材の面で大きく異なる。

【類話】『伽婢子』八一三「哥を媒として契る」(富士2)。

【余説】本話中には十五首の和歌がみられるのだが、その多くは作者の創作ではなく、先行する和歌の利用である。和歌の初出は勅撰集等であるが、実際には近世に刊行された『和歌題林愚抄』『明題和歌全集』等の類題和歌集から選出し、物語の展開に即して歌の一部を改変するという方法を用いている。(富士2)。土屋順子「『狗張子』の和歌」(『大妻女子大学大学院文学研究科論集』9、平成11・3)。

第三卷

伊原新三郎蛇酒を飲事

猪熊神子罪業を恐る、事 朝日寺観音の奇瑞
諸国修行の僧甲府の妖物を難倒す事

隅田宮内卿の家怪霊の事
大内義隆の歌人達の事
深川左近が亡霊来世物語の事
蜷川親当鳥辺野妖物に逢事

狗はりこ巻之三

○伊原新三郎蛇酒を飲

*元和年中に*伊原新三郎といふもの久しく*牢浪して、ある日宿を出て*参州みかたが原に出たり。夏の日の暑氣甚だしきに梢に吟ずる蟬の声涼しくして、*不覚にあゆみゆくほどに、日すでに山のはにかたふきて風やはらかに吹おこる折から、道のほとりに林あり。

木のまよりみれば、あたらしく作れる家四つ五つ見えたり。*餅酒をあきなふ店とおほゆ。立よりてやすまんとするに、年のほど十五六なるむすめの顔うつくしきが立出て、こは武家がたの出て*あそびし給ふ所なり。暫やすらふて御通りあれかしといふ。こと葉つき愛らしく、家に入れば又余の人もなし。新三郎たはふれか、れば、此娘はしたなくもいはず。父も兄も内にはあらず。何かはかるべきとて、いとなつかしげに*そなれか、るを、新三郎よろこびて、ともし火とるほどに暮たり。さだめていまだ何をめさで、つかれ給ふらんにとて、餅とり出してす、めけり。酒はなきかといへば、よき酒のありとて奥に入て盃とりそへて出しけるを、新三郎もとより飲人なりければ、娘と友にふたつ三つのむになく成ければ、また取にたちけるを、新三郎さし足して奥のかたを見るに、大なる*蛇を釣さげて、刀をもつて、その蛇の腹を刺て血の*したるを桶にうけて、何やらん入て酒になしけり。

新三郎心まどひておそろしくなり、いそぎ戸を出てはしる。娘跡より追かけてしきりによばふ。東の方に声をあはせて、あたら物を取

にがしけりといふ。新三郎跡を見かへれば、その長*一丈ばかりなるもの追て来る。すでに林の中に入れば、何とはしらず白き事雪のごとくなる物、木のもとより立あがる。林の外に人の声ありて、こよひ此ものを捕にがしなば、明日は我ら大なるわざはひを受べし。それのがすなとよばる。新三郎ますくおそろしくて、やうく町はづれまで*かべりつきて家の戸をたたく。戸をあけて内に入しかば、しばしはあえぎて物もいはず。暫らくありて、かうくの事ありとかる。あるじおどろきていはく、その林のあたりには、*茶店もなく家居もなし。さだめて*妖物にあふて、おそろしきめを見たまひぬらん。とをき所の人は、をりくかどはかされて夜もすがらなやまされ、帰りに後にはわづらひいだす人もあり。新三郎はやくのがれて、こ

とゆへなきこそめでたけれといふ。

余りのふしぎさに、新三郎宿に帰りに人あまたかたらひ、その酒のみし所に行て見るに、家もなく茶店もなし。人氣まねる野原のすゑ、草むら茫々と滋りて物すさまじくさびしき中に、草にまとはれて、長*二尺ばかりの*婢子の手あし少欠損したるあり。これや娘に妖ぬらんとあやしむ。そのかたはらに、その長二丈ばかりなる色くろき蛇、すでに腹のあたり割やぶれて死してあり。それより東のかたには人の骸骨一具あり。*穴むらは雨露にさらされて、手足筋骨はつゞきて、白き事雪のごとし。みなことごとく打くだきて、薪をつみて焚すて、堀の水にしづめけり。新三郎は日ごろ中風の氣あり。*癩「かつた」が、りて侍べりしが、*蛇酒を飲ける故にや、やまひは根をぬきて愈たりとぞ。

○元和年中 一六一五〜二四年。一代將軍秀忠の代。慶長二十年（一六一五）

四月、大坂夏の陣が起こり、同年七月元和に改元。 ○伊原新三郎 未詳。

○牢浪 卷二「一注「牢浪」参照。「元和年中」に「牢浪」と設定するのは、

伊原新三郎が大坂夏の陣で大坂方に属していたことを暗示するか。○参州みかたが原 駿河国引佐郡三方原（現静岡県浜松市三方原町）。浜名湖の東に位

置する台地で、和地、祝田、都田の三村の入会地であったことが地名の由来ともいわれる。元龜三年（一五七二）、武田信玄と織田信長・徳川家康の連合軍とが戦った三方原の戦は有名（巻四）。「味方原軍」参照。

○不覚に 知らず知らずのうちに。無意識に。○餅「餅モチイ」（倭玉篇）。○あそびし給ふ所 武家が野駆け、早駆けなどして武芸の鍛錬をする場所。○そなれかゝる「そなる（磯馴）」は、樹木が潮風にさらされることとで地面に傾いて生えること。傾くことから、ここでは「しなだれかかる」の意に用いる。○蛇「蛇クチナハ」（易林本、饅頭屋本、和漢通用。

○したる「シタゲル Kiataru 滴る」（日葡）。○一丈「丈」は長さの単位で「尺」の十倍。一丈は約三〇センチメートル。○かべりつき「かへりつき」の誤刻。○茶店「茶店 チャテン」（書言字考）。

○妖物「妖物」の用字は確認できないが、他に「術物」（黒本本）、「老魅」（書言字考）、「妖化物」（易林本）、「天化」（饅頭屋本）、「妖化」（合類）などの表記がある。○二尺 一尺は約三〇・三センチメートル。○婢子 伽婢子のこと。伽婢子は、子供の守りとして用いた三〇センチメートルほどの人形。魔除けとして枕元に置いた。また、身分ある家では嫁入り道具ともなった。○穴むら 人や鳥獣の肉。「穴 シ・ムラ」（天正本）。○中風

脳卒中の発作後におこる半身不随のこと。ここでは「癩」と同等に用いられていることから、歩行が困難である程度の意。○癩 癩病。癩菌の感染により、皮膚や神経に症状の現れる慢性伝染病。ハンセン病。「かたい・かつた

い（乞丐）」とも称した。○蛇酒「烏蛇酒 諸風ノ頑痺、癰緩、癰急、疼痛、疥癬、疥癬ヲ治ス」、「蛇蛇酒 諸風痛痺ヲ治シ、虫ヲ殺シ、瘡ヲ辟ケ、癰風、疥癬、惡瘡ヲ治ス」（『本草綱目』二五。烏蛇はコブラ、蛇は錦蛇のこと。頑痺・癰緩はしびれ、癰急はひきつり、疼痛は痛みの症状のこと。惡瘡・疥癬は皮膚病の一種。痛痺はリウマチで痛みを伴う病。疥癬は疥癬虫の寄生によりおこる感染性の皮膚病。）「蝮蛇酒 楊梅瘡、年久キ者及ビ諸惡瘡、癰狂ノ等ノ病ヲ治ス」（『本朝食鑑』二）。蝮蛇はマムシのこと。楊梅瘡は梅毒のこと。

【出典】『太平広記』三七二「盧涵」へ富士2。あらすじは次の通り。

唐の開成年中（八三六―八四〇）、盧涵という学究が、ある夏の日万安山の麓から一人馬で出かける。日暮れになり近くの店に入ると青衣の美しい娘がいた。父と兄が不在であることを知り盧涵は悦び酒を飲む。酒を足しに室を出た娘の後を追うと、娘は大烏蛇をさばきその血を酒に変えていた。驚いた盧涵は逃げるが、途中娘の声が聞こえ、さらに林の中から雪のように白い物が、「今宵取り逃がせば禍がある。」と呼ばわる。盧涵が麓の荘に返ると人が無いので車の下に隠れていると、戟を持った者が現れ家の中にいた小児を殺すのを目撃する。明るる日、荘の客十余人と武器を持ち件の場所へ赴くと、林の中に二尺ほどの婢子と烏蛇の死骸、さらに東には別の骨があった。昨晩の白い物はこの骨であった。盧涵等はこれらを焚き捨てた。盧涵はもともと風疾を持っていたが、蛇酒を飲んだことで愈えていた。本章は、右の話と構成、結末、用字に至るまでほとんど一致する。ただし、本章では小児殺害の件を除き、蛇酒の効用として癩を治すことを加える。

【余説】右【出典】で述べた通り、本章は先行作品を忠実に採用する。茶店の娘と骸骨の関係は明らかにされないが、時代設定を大坂夏の陣の後とし主人公を「久しく牢浪」の身の上とするなど、戦の後の荒廃した雰囲気を利用し怪異の話にリァリティーを持たせている。

○猪熊の神子

*元和のすゑの年、京都*四条猪の熊に年老たる*神子あり。一人の娘をもちたり。神道の理は露斗もしらず、神の御たくせんとして、あらぬ事をいつはり、物をとり、*数珠をひくといふ事をいたし、*占兆をいひ、をろかなる女わらはをたぶろかし、雨ふり風のふくにつけても、神の御つげなりとて人をおどしす、め、きたうをせさせて、小袖帯などまでも、たぶろかしとり、*仏法の事は耳にも聞いれず。

とかくして世をわたる事、すでに七十余年をくりむかへ、娘は位おはする家に、宮づかへをせさせて、此神子ことの外に老をとろへ、今は世の中の事よろづ心ほそく、かゝる所作も空おそろしくおぼえ、いくほどもなき命も頼みすくなく、来世の事も心もとなし。さればとて今までせし業も打すてがたく、思ひ歎きつ、*北野の朝日寺にまいりて、我身此世のなりはひは、身すぎのために、人をたぶろかし、利得を望み諂らひいつはり、正直の道にそむく事、神のめぐみ仏のをしへにはづれたるもの。只ねがはくは死して後の恥を隠し、たましゐをたすけて給はれと祈り奉る。まことの心骨にとをりて、涙のおつる事雨のごとし。それよりは隙あれば常にまうで、おがみ奉りけり。月日重なりて神子俄に病おこり、此世の限りと思ひければ、娘のもとへ使をつかはしけり。年比は神子の娘といはれんには、人もおとしめあなづらんは口惜かるべしと、里の有様深く隠して音づれのたよりも絶々に忍びけるを、此たびは生身のをはり、此世のいとまごひなれば、人には忍びてはやく帰り給へといひつかはす。娘おどろきていそぎ行ければ、母大によろこび目をひらき、嬉しげに見ながらそのま、絶入りけり。年いまだわかきむすめなり。かゝる事いかにすべき才覚もなく只泣しづみて、是いかゞせんと口説けれども、*家居まばらなる栖なれば、たやすく問かはす人もなし。

日も夕暮に成て、わかき法師四五人來りて、これは朝日寺にて常に見なれたる人ぞかし。死侍べらば戸を隠してたべと、ふかく頼みけるま、来れるなりとて、甲斐なくしく取した、め棺を用意して戸をおさめ、*阿弥陀が峰に行て火葬にし、此人の事来世も心やすく思はるべし。我らよくく跡をもとふらひてまいらせんとありしかば、娘悲しき中にも有がたく、さて御寺はいづくにて御名は何と申すやらんと問奉れば、朝日寺の*正観房と尋ねよとて出て帰り給ふ。白きうす衣に蒔絵の香合とりそへて参らせたり。

次の日に成て朝日寺にまいりて尋ねしかども、この寺にかやうの僧はなしとこたへたり。あやしくおもひながら堂中にまいりておがみ奉

れば、きのふまいらせしうす衣は観音うちかづきて、御ひざの上に香合はのせておはしましけり。娘これをおがみ奉るに、有がたさかたじけなさ、此御*本尊すでに母を葬ふり給ひし事はうたがひなし。来世もかならずすくひ給はん。*現世後生ともにすて給はぬ*大慈大悲の御ちかひかなと、歎きの涙をき所なし。かくて下向の、ち常にあゆみをはこびて、母のほだいをいのり奉りしに、娘またよき幸ありて、*和泉の境にくだり、しかるべき人の妻となり、子どもあまたまうけて家さかえけり。

○元和のすゑの年 元和九年（一六二三）。この年の七月、將軍は三代家光となる。○四条猪の熊 四条通と猪熊通が交錯する辺り。現在の立中町（京都市下京区四条猪熊西入）近辺。○神子 神社に属さず、祈祷や口寄せ、勧進、また芸能や売春などを行った女性の下級宗教者。御子、巫女とも。「大原神子 今の大原神子といふは京のかたほとりに住て、人の忘れじぶんにはありくなり」（『人倫訓蒙図彙』七）。○数珠をひく 数珠をつまぐるの意か。「占形を引く」と混同したか。○占兆 占形。占により吉凶を判断すること。「占」、「兆」ともに占う意。○仏法の事は耳にも聞いれず 仏法を身につけようとしめない様子。「数珠を引く」から仏教に、「占兆をいひ」から神道にそれぞれつながる。ここは、本文「神道の理は露斗もしらず」に対応させた表現。○北野の朝日寺 山城国葛野郡（現京都市上京区馬喰町）にある北野天満宮の本殿西回廊の外（『山州名跡志』八）にあった寺。明治の神仏分離令により廃された。天満宮が北野に鎮座したのは、天慶三年（九四〇）七条に住む文子という女性に託宣があり、朝日寺の僧最鎮（最珍とも）と共に尽力して祠を建てたことにはじまるという。地誌類で朝日寺の本尊は、一面観音（『菟芸泥赴』六、『山城名勝志』七、『都名所車』）、あるいは千手観音（『山州名跡志』八）ともいわれる。また、天満宮一の鳥居の西にある観音寺（現京都市上京区観音寺門前町）は、朝日山と号した。同様に地誌類で観音寺は、本尊を菅原道真作の十一面観音（別名東向き観音）（『京師巡覧集』十三、『雍州府志』五、『山州名跡志』八）、あるいは千手観音（『洛陽名所集』九）

ともいわれる。このように、朝日寺と観音寺は地誌類を見る限りやや混同されているようである。これは、『京羽二重』四に「朝日寺 北野御本地堂、本尊観音東向ト称ス」とあること、また『雍州府志』五には、「観音寺 朝日ノ観音ト称スル者ハ、本社ノ西ニ在テ南二向フ」とあること、さらに観音寺が収蔵する罽口（慶長十二年に再興の時、豊臣秀頼から送られた）に、「朝日寺観音堂」の刻のあることから窺える。また、猪熊の神子が「隙あれば常にまうで」たとする観音は、「白きうす衣」を「うちかづき」ていて、本章挿画も同様に描かれるが、この姿はおそらく白衣観音であろう（『仏像図彙』二、ただし該所では白衣を肩からさげている）。なお、観音寺には明暦元年（一六五五）に明の陳元賛禪師が伝えたという白衣観音（元禄七年に堂完成）がある（副住職の談、及び「観音寺略縁起」）。以上のことから、猪熊の神子が詣でた「朝日寺」とは観音寺を指すと推定される。○骨にとりて 骨に徹る。強く深く感じること。「骨に染む」と同意。○家居まばらなる栖 本文に即す限り四条猪熊をさすが、「家居」が「まばら」とはいえないであろう。未詳ながら本章の出典と関わるか。○阿弥陀が峰 山城国愛宕郡阿弥陀ヶ峰（現京都市東山区今熊野阿弥陀ヶ峰町）。東山三十六峰の一つで、鳥辺山ともいった。標高一九六メートル。古くから葬地として有名。○正観房 未詳。『神仏分離資料』所収「北野神社神仏分離調査報告書」の「目代・宮仕」の記事には、多くの「坊」が報告されているが、「正観房」は見られない。なお、振り仮名「しやくわんぱう」は「しやうかんぱう」の誤か。○本尊振り仮名「ぼぞん」は「ほんぞん」の誤刻。○現世「ゲンゼ Gueje この世」（日葡）。○大慈大悲 仏語。仏や菩薩が衆生を慈しむ広大な慈愛。○和泉の境「境」は「堺」。摂津国住吉郡榎津郷（現大阪府住吉区）と和泉国大鳥郡塩穴郷（現大阪府堺市）の境界部。「堺」の地名は、国境に位置する事に由来する。中世以来の貿易港である堺津を核として発展した港湾都市。

【出典】未詳。

【余説】主人公猪熊の神子を、神道及び仏教の双方共にその本質を知らない人物であると強調する。出典は未詳ながら、冒頭で設定時代の雰囲気と主人公の性格付けを行うのは前章と同様で、冒頭以外の本文は出典の存在を

窺わせる。また、注（朝日寺）でも触れたが、猪熊の神子が詣でた観音が、もしも明暦元年に伝わったという朝日山観音寺の白衣観音をさすとすれば、作者は同時代の情報を入れたことになる。

○甲府の亡霊

* 武田勝頼は織田信長公に没落せられ、* 城堡は一片の煙となり、草のみ生茂り狸の*ふし戸、狐のすみかと成たり。そのあたりには百姓の家、所々に立ったりしも、*むかしにもあらず、さびわたりて、物すさまじき有さまなり。折々はあやしき事も有て、人をおどろかし侍べるとぞや。

諸国修行の僧*好雲房とて、もとは*竹田の人なり。世をいとふて家を出つ、諸国をめぐりけれども、*所に関をすへ、*渡りには奉行をそへて、心やすく往来も成がたし。此*甲府にめぐり来て、日の暮ければ、あやしの茅屋に宿をかりけるに、あるじのいひけるやう、旅の僧に宿をかし奉らんはいとやすし。夜ふけてあやしき事のあり。それだにくるしかるまじくは入てとまり給へかしといふ。好雲聞て、本よりすする身のならひ、たとひ命を失なはれ侍べるとても、何かくるしかるべき。宿なき野のすゑ山ぢのあひだには、岩ね木のもとふるき社のかたはらにも、一夜をあかす事おほし。まして主のおはするには不足なしとて、内に入れば、亭のおく、*菅ごもの上にをきて、粟飯した、めてす、めけり。*松の火をあかしに、ともし火のかはりとし、さて物がたりするやう、そのかみはゆ、しき城にて要害きびしく、堀の外には諸侍の屋敷軒をならべてたちつゞき、にぎやかなりし所なりけるを、今は没落して、かゝる浅ましき賤が*ふせ屋のみ、わづかに*すみわたるばかりなり。むかしの人の執心残りて、あやしき事の侍べるなり。おどろき給ふなとぞかたりける。

かくて夜もふけ、れば、主は内に入て、好雲只独り念仏し、心を

すまして臥けり。かゝる所に一人の女年のほど十七八とみえしが、枕もとの障子をひらき内に入て立たり。顔うつくしく、こぼれかゝる鬢のあたり、その肌は雪にあらそひ、すこし打えみて、*秋の空いと静かに闇の物さびし。*蜚夜もすがら月のもとに吟じ、更ゆくまゝに風そよぎて、桐の葉もふみわけがたく成まゝに、此夜をいかにあかしかねつ、これまでまいりぬとて、

*草の葉も露も我身の上なれば

ほさぬ袖だに月やどるらん

とうち詠めて、いかにお僧は夢もさめ給はぬやといふに、好雲物をもいはざりしかば、女又云やう、こよひ敷たへの賤が菅薦床もむなしく、さえゆく月の影も惜きに、酒ひとつ汲て旅の心をもなぐさめばやとそ、のかせども、更にものをいはず。女又いふやう、さのみにつらく、*くちなし色のたへて物をものたまはぬかな。たとへば恋路の闇にまよふ人の、まだ下紐のとけぬにも、また*一こと葉は聞ゆるぞかし。いかにとかくのいらへもなくておはすらん。

*いかにかく問どこたへぬくちなし

花も染れば色に出るを

又声うちあげて詠ずる詞に、

*黄帝上天時

七十二玉質

*鼎湖元在茲

化作黄金質

好雲聞ながら、心にもかけず物をもいはざりしかば、女座をたちて帰るとみれば、形ちは跡なくきえうせたり。初は好雲が心を引て、乱る、思ひをとらんとせし所なり。後の詩のこゝろは、昔黄帝は鼎湖といふ所にして、龍にのりて天にのほり給ひしに、七十二人の玉女は、その身生ながら化して、黄金のたからとなりしを、地中に埋まれしといふ事なり。これは*此城の跡に黄金を埋みをかれしを、今我に心をうつしたはふれ給はゞ、そのあり所をしらせ侍べらんといふ心ばへなり。人の心を乱す物は色と財とのふたつにあり。好雲世をのがれて、よくおさめたる故に、何のわざはひにもあてられざるこそ有がたけれ。

今は心やすしとおもふところに、夜すでに*丑三つばかりになりしかば、月もやう／＼かたふくころ、庭のおもてさはがしく聞えて、そのたけ*九尺ばかりの男、その手に曝かうべ五つ六つもちて、枕もとの障子をあらけなく引あけて内にいらんとす。好雲むくとおきて手まへにきたる棒をとりて、よこざまに薙ければ、妖物うちたをる、とみえし。しやれかうべともにうせにけり。主おき出て火をともし、庭に出て見れども、何の残りたる事もなし。夜もやう／＼あけがたになり、東のかた横雲たなびきければ、好雲も旅だつ空に出ていにけり。後にそのおはる所をしらず。

○武田勝頼 天文十五年、天正十年（一五四六、一五八二）。甲斐の武田信玄の四男で、母は諏訪頼重の娘。はじめ諏訪姓を名乗り、伊奈郡高遠城主。元亀四年（一五七三）四月、信玄の死により家督を継ぎ武田姓となる。天正二年（一五七四）遠江の高天神城を落とすも、翌年三河長篠で織田、徳川の連合軍に大敗してよりのち、家臣の離反が相次ぐ。天正九年（一五八一）十二月、韮崎に新府城を築き甲府より移転。翌十年三月二日、織田・徳川の侵攻により、新府城に火を放ち逃走し、同月十一日山梨郡田野（現山梨県東山梨郡大和村）で自害。享年三十七歳。これにより武田氏滅亡。○城壘は一片の煙となり「城壘」は、甲斐国山梨郡府中（現山梨県甲府市）にあった躑躅ヶ崎館をさすか（後出注「甲府」参照。天正九年十二月、勝頼は新府城移転に伴い、躑躅ヶ崎館をこごとく破却し、泉水の植木や名木までも切り捨てたという（『甲陽軍鑑』品五七「甲州くづれの事」）。○ふし戸 臥所。寝る所。○むかし 武田信玄の時代を指す。○好雲房 未詳。○竹田 ここでは武田氏に縁のある人の意か。「竹田」の地名は、山城国、大和国、丹波国、但馬国などにあり、本文に即す限り特定できない。○所に関をすへ 近世の関所は、天正十八年（一五九〇）の徳川家康の関東移封から一、二年の間に原型が出来たもので防衛を目的としたが、それ以前の中世の関所は、関銭徴収を目的とした経済的な色合いが濃いものであった。本章という関所は後者で、しかるべき所の許可なくして私に作られた関所をいう。なお、織田信長

による関所制度の撤廃は、はじめ信長の分国内に限られていたが、豊臣秀吉によって全国的な政策となった。○渡りには奉行をそへて 前項と同様に、渡河のための渡し銭、津料をとるため支配、管理する者を置く状態をいう。○甲府 甲斐国山梨郡府中（現山梨県甲府市）。「甲府」とは、甲斐国の府中の意。永正六年（一五〇九）武田信玄の父信虎が躑躅ヶ崎に館を築いてから、天正九年（一五八一）勝頼による新府移転まで、武田氏の本拠地として栄えた城下町。武田氏の本拠地が新府に移転してから、徳川の支配が確立される天正十年（一五八二）末頃までの期間は「古府中」と呼ばれた。武田氏滅亡後、信長より甲斐を与えられた河尻秀隆は、古府中を拠点として国内の支配にあたったが、信長の死後に殺害され、以後徳川氏の支配を受けた。なお、本章で甲府は「草のみ生茂り狸のふし戸、狐のすみかと成」ような時期と設定されている。このような不安定な時期としてふさわしいと考えられるのは、勝頼が新府に移転した天正九年十二月から、徳川家康が事実上の甲斐国支配を始めた天正十年八月までの約八ヶ月間となる。しかし、この期間も甲府が織田信長、河尻秀隆により支配拠点として使用されていることを考慮すると、やや本文にはそぐわない。あるいはここは、勝頼によって動乱の中で築かれた新府をさすか。○菅こも 菅（カヤツリグサ科の植物の総称）で編んだむしろ。○松の火 松明のこと。「炬、今多ク松ヲ用テ故ニ太比末豆と名ク」（『和漢三才図会』五八）。○ふせ屋 伏屋。地面に伏せたように小さな家。貧しい人の住む家。○すみわたる 住渡る。同じ所に住み続けること。住み着くこと。○秋の空いと静かに この行文は出典中の「秋室寂寥 蛩啼夜月 更深風動 桐葉墮階」に一致する。○蛩 「蛩 キリハス」（易林本・饅頭屋本）。○草の葉も 『題林愚抄』三二四九、『明題和歌集』三八九六に類歌があるが、いずれも下の句は「袖のみほさぬ秋の夕暮」である。○くちなし色 クチナシの実で染めたような、赤みを帯びた濃い黄色。クチナシの果実は熟しても口を開かないことから、ここでは、口が無い、何も話さない様子をたとえる。○一こと葉 後出の和歌を指す。○いかにかく 未詳。○黄帝 古代中国の伝説上の帝で、五帝の一人。五絶の詩は出典に登場するが、出典では、「玉質」は「玉女」に、「質」は「芝」となっている。

○時 振り仮名「しき」は「とき」の誤刻。 ○鼎湖 河南省閿郷県の南部、荆山の麓にある湖。黄帝が龍に乗って上仙したという所。後出「鼎湖」の振り仮名「ていこ」は「ていこ」の誤刻。 ○玉質 美しく身分のある女性。 ○賞 「賞 タカラ」（倭玉篇）。 ○此城の跡に 数ある武田氏の埋蔵金伝説のひとつか。 ○丑三つ 午前二時から二時三十分頃。 ○九尺 約二八センチメートル。

【出典】『太平広記』三四八「沈恭礼」へ富士一。あらずは次の通り。

唐の太和年中（八二七～八三五）、閿郷県の役人沈恭礼が撰湖の役人となるため鼎を離れた日、夕暮れの湖城で李忠義という男に随行を求められこれを許す。李忠義は、今十七八の蜜陀僧という女子があらわれるが、その者と言葉を交わしてはいけないと言ふ。しばらくして美しい女が現れ、「秋室寂寥 蛩啼夜月 更深風動 桐葉墮階」、「黄帝上天時 鼎湖元在茲 七十二玉女 化作黄金芝」と吟ずるが沈恭礼は答えないので、女子は去る。次に白衣の人が現れるが、これとも言葉を交わさない。李忠義は、次に手に三つの幡幢を持った二丈余りの若者が現れたなら、これを打てと言ふ。沈恭礼は言われた通りこれに攻撃する。その後李忠義は姿を見せなかった。

本章では右出典に登場するいくつかの怪異譚の内、沈恭礼の前に最初に現れる十七八の女子の怪の話と幡幢を持った若者の話とを採る。これ以外にも情景描写を「秋室寂寥 蛩啼夜月 更深風動 桐葉墮階」に借り、また五絶の詩句もほぼ忠実に用いるなど典拠を利用する度合いが高い。出典中、主人公沈恭礼に対し、怪異登場について忠告し助言を行った李忠義にあたる人物は、本章では登場しない。

【余説】本章の時代設定は、本文に即すると武田氏滅亡の直後となり、荒廃の様子を示し亡霊を登場させる雰囲気を作り出している。亡霊の正体を示さないことも、ひとつの特徴か。

○隅田宮内卿家の怪異

人の家のほろびんとしては、かならずあやしき事のありといふ。されども心をつけざるには、しらね事もあるものなり。後に思ひあはするもあり。

*村上義清の家臣 *隅田宮内卿は聞ゆるもの、ふなり。 *天文十五年二月に武田信玄 *人数をもよほし、 *信濃国小県戸石の城にをよせて軍のありしにも、信玄ひさうの侍大将 *甘利備前守をうちとり、手がらをあらはしける大功のものなり。

しかれども、運の末に成りけるゆへにや、よろづ心になはず。かゝる世の中にいつまでありても、只おなじ有さまにて、立身をすべき道もなしとおもひ *くづをれて、病ありとて暫く引こもりて居たりけるに、家のうちに *けしかる妖物ありて、その姿はみえず、朝夕の飲食物は人なみに乞とりてくらひけり。内にめしつかはる、者ども、若宮内卿うはさの事をかたれば、空よりいましめて、汝ら主君の事そしり侍べらば、宮内につけて世の *をきめにせさすべしといふ。これによりて、よしあし更に沙汰する事をとめたり。夫婦物がたりしてこのばけ物の事をかたれば、いかに我が上の事をいふぞや。あしくいはゝ家のため禍になるべしと、其声をかしく打なまりて聞ゆ。朝夕とありあつかふ道具衣類、今までありとみるも、たちまちになくなり、家うち尋ねても行がたなし。とばかりすれば目の前にあり。家うち上下これに *倦じて山ぶしをやとひて祈禱をせさするに、符を張ばかたはしよりまくりすて、盛物をと、のへて壇をかざれば引くづしけるほどに、山ぶし腹をたて、 *いらたかををしもみ、 *神呪をとなへ *印をむすべば、その手の指どちつてはなれず、此うへはとて山ぶしは出ていにけり。 *神子をたのみて梓にかくれども、いか成ものとも名のらず、 *弓の弦を打ちきりく空のあひだにわらひけるこゑ聞えてそのしるしなし。さらばとて *巫を頼みていのらするに何とはしらず

巫かんさのうしろ、つめたくおぼえて取出とりだせば大なる木枕きまくらをさし入たるなり。
*祝言のつとをとなへて*御幣みへいをふりたていのりければ。妖物まじけ*屋の梁はりにのぼりていひやけるやう、汝きみ我をうるさがりてあらぬ者をよびよせ、きたうの有さまをこがましや。その儀ぎならば只今此家をくづさん
とて、梁はりの上うへ鋸のこぎりにて挽切ひききりやうに聞えて、夜に入てますくはげしかりければ、火をともして梁木はりぎのあたりをみすれば、火を吹けしいよくつよく挽ひききる声あり、家うちことく外に出いしつ、更に火をともしてみれば、梁はりはもとのごとくにしてその跡あともなし。妖物手まじけでをうちてわらひけり。貴僧たつとくを請しやうじて経きやうよみつ、家に*五辛しんをとめられしかば、妖物まじけは静まりしかども、これや家のさとしなりけん。
宮内卿くわいしやうは*心こころぞろにはやり出て、*笛吹峠ふえふいたけの軍に討死うちじして跡たえにけり。

○村上義清 文亀三年(一五〇三)一五七三。信濃国埴科郡(現長野県埴科郡坂城町)葛尾城主。信濃北東部で最大の大名。天文十七年(一五四八)、信濃に進攻してきた甲斐武田軍を上田原で、同十九年(一五五〇)戸石城で迎撃して破る。(村上)義清、信濃守、信濃国に住し、天文年中、武田信玄がために領知を失ひ、越後国にのがれ、長尾景虎によりて越後国に住す、天正元年正月朔日、同国魚沼郡赤沢城にをいて死す、日龍寺と号す、信濃国埴科郡満泉寺に葬る」(寛政重修諸家譜二三五)。また『兼見卿記』には根知城で没したとある。○隅田宮内卿 未詳。『甲陽軍鑑』、『村上家伝』には義清の家臣の中に「須田」姓の者がみえ、(信濃国)高井郡福島城は、須田左衛門の居城にして、初め村上、後上杉幕下たりしが、天正十二年、景勝に族滅さる。此の須田氏は『甲陽軍鑑』品十七に「スタ七十騎」と載せ、北越軍記には「紹田左衛門尉・真田左衛門と申し合わせ、景勝へ逆心」(『姓氏家系大辞典』)とあるが同一人物かは不明。○天文十五年二月『村上家伝』では、戸石合戦を「天文十五年三月中旬」としているが、実際は天文十九年九月。○人数をもよほし ここでは、大軍を率いて、の意。○信濃国小県戸石の城 信濃国小県郡(現長野県上田市大字上野字伊勢山)に築か

れた山城。武田信玄はこの城を包囲して義清軍と対峙したが、激戦の末敗退した。このときの信玄の敗戦を「戸石崩れ」という(『甲陽軍鑑』品二五・四三)。○甘利備前守 甘利虎泰。?天文十七年(一五四八)。甲州巨摩郡甘利郷の領主。「信州戸石にて合戦の時、…村上義清にきりくづされ、信玄衆ことくはいぐんして、殊、さきての侍大将、甘利備前守うちじにする」(『甲陽軍鑑』品一四)。○くづをれて 気が弱って。○けしかる 得体の知れない。○をきめ 仕置き。○倦うじて いやになる。○いらたか 苛高数珠。とくに山伏が用い、珠が角張っているので押しもむとときに高い音を立てる。○神咒 靈験が現れる神変靈妙なる呪。ここでは、陀羅尼・真言を誦す。○印をむすべば 手指を組み合わせて作る形。修行者が諸尊の法徳を悟入するときにする。○神子 ここでは、梓巫女。口寄せを専業とし、霊を呼び寄せて言葉伝える。○弓 梓弓。梓巫女が神がかり状態に入るために鳴らす、梓の木で作った丸木の弓に弦を張ったもの。甲斐・信濃国より多く産した(『類聚名物考』三三)。○巫 ここでは男の「現(をかむなぎ)」の意。神の神託を伝える者。○祝言 「祝言 ノット」(黒本・伊京本・天正本・饅頭屋本など)。○御幣 幣帛の敬称。神官はこれを棒持して祈念し、罪穢れをはらう。○屋の梁 柱の上に横たえ、屋根を支えるために棟に渡す材木。はり。○五辛 五種の強い辛みや臭みを持った植物。その種類は仏家・道家などで小異があるが韭・葱・大蒜・辣蕪・薑の類。○心こころぞろに 気持ちが落ちつかない様子で。○笛吹峠 碓氷峠。信濃、上野国境(現軽井沢町と群馬県碓氷郡松井田町との境)にある峠。武田信玄は永祿四年(一五六二)、上杉景虎の小田原攻めに際して碓氷峠に出陣した(『甲陽軍鑑』品二六)。

【出典】『搜神記』十七「倪彦思」(麻生)。あらすじは次の通り。

呉の倪彦思はある家に化物が出入りしては数々の悪戯をしているのを知り、道士を招いて退治をしようと試みるが、反対にその化物から、土地の典農の不正を知らされる。

○大内義隆の歌

*大内の義隆は、其家いにしへ推古天皇の御時より初まり周防の国山口といふ所に城郭をかまへ、中国の大名となり*七ヶ国をしたがへ、*從二位左京大夫に経あがりけるを、大にをこりて*倭人にまどはされ、*政道よこしまになり、色にふけり酒に長じて、老臣*陶尾張守に国をうば、れ、廿四代の家系をうしなひ、生害せられけり。世の盛なりし時は、*京都よりれきくの人々あまたよびくだし、花の春、紅葉の秋、雪のあした、月のゆふべ、歌よみ詩つくり、酒宴遊興に隙なく侍べりしに、たちまちにほろび給ひける事と、心ある人はいたはしく思はぬはなし。

そのころ義隆忍びて通ふ女房のもとへ、文をかきてつかはされしを、その使聞あやまりて、本御台の御かたにもちてまゐりつゝさしあげ、るに、御台此文を見て、義隆の通はれける女房のもとへ、かくよみてやりける

*頼むなよ行末かけてかはらじと

我にもいひし人のことの葉

又義隆の御かたへ

*おもふ事ふたつありその浜千鳥

ふみたがへたる跡とこそみれ

義隆此哥を見て、御台の心のうち大に恥かしく、その使をばあえなく手うちにせられ、それよりして御台のかたへ通路を切給ひしが、すでに没落の時ともなひて、泣々城をば出られけるが、頼むかたなく、*義隆以下主従十一人一同に腹切て、大内家たちまちにほろびしかば、御台をはじめて近くめしつかはれし女房たち、たがひにさしちがへてかさなりふしける有さま、あはれなりし事共なり。

暫しがほどは死ほろびし*深川の大寧寺の内に、夜ごとに女の声にて泣ければ、寺の僧衆、*無遮の法会をおこなひ、経よみてとふら

ひしかば、その啼こゑもとまりけり。

○大内義隆 永正四年(天文二十年(一五〇七)一五二一)。周防・長門・豊前国など西国の守護大名。大内義興の長男。尚古的な学問・芸能を好み、京都から多方面の師を招いて学んだ。天文二十年(一五五二)重臣陶晴賢の叛逆により自刃した。「八月廿九日、周防ノ山口ノ城主大内ノ義隆ガ家老陶尾張守晴賢謀叛シ義隆ヲ逐フ。義隆出奔シテ長門ニ到ル……九月二日、晴賢カ兵追テ長門ニ到ル、義隆大亭寺ニ置テ自害ス」(『將軍家譜』源義輝)。○七ヶ国「周防、長門、豊前、筑前、石見、安芸、備後七箇国の守護たり」(寛政重修諸家譜「二九二」)。○從二位左京大夫「天文十七年戊申……大内、多々良義隆、四十二、大貳。侍從。兵部卿。叙從二位」(『公卿補任』)。○倭人口がうまく、よこしまな人。「倭人 ネイジン、ネヂケビト」(書言字考)。○政道 政治。「Xeio セイタウ」(日葡)、「政道 セイタウ」(書言字考)。○陶尾張守 陶晴賢。大永元年?弘治元年(一五二一?一五五五)。大内義隆の重臣。主君義隆の行き過ぎた文事への傾倒・政治腐敗を大義名分に、大内氏諸重臣の連合軍を組織。謀反を起して義隆を自害に追い込んだ。のちに安芸国嚴島で毛利元就の奇襲に遭い自殺した。○京都よりれきくの人々あまたよびくだし「伽婢子」三十四「梅花屏風」の冒頭「公卿、殿上人おはく義隆をたのみて周防の国にくだり、山口の城に身をかくし、世の乱れをのがれ、京のさはぎをまぬかれ給ふ」とあるように、応仁の乱の後、京都の学問・技芸・文化を好んだ義隆が、都から公家や僧、芸能者らを招いて厚遇したり、領国に住わせていたことなどを指す。○頼むなよ「醒睡笑」五には、次の「ふみたがへ」の歌は収録されているがこの歌はない。だが「大内殿在京の時、京より御台へ、なびくなよ手馴れし庭の糸薄いかなる風のたよりありとも、大内殿御台の返歌、風もなしなびかぬものを糸薄君を思へばこころみだる、」の歌があり、御台はこの際の義隆の歌をもじったものか。また「武者物語」下、「御伽比丘尼」一一三「恨に消し露の命 付律がのべの女鬼」には「頼むなよ行末かけてかはらじと我にもいひしことのはのすゑ」とある。○おもふ事 ありと有磯、文と踏みの掛詞。前出「醒睡笑」五にも

同歌あり。また『御伽比丘尼』二二三では、「かよふかたふたつありそのはまちどりふみたがへたる跡とこそ見れ」とある。○義隆以下主従十一人一同に腹切て「……カクテ味方悉討レケレバ。義隆卿ハ不叶シテ自害アルベキトテ。九月朔日ノ巳ノ刻ニ深川大寧寺ノ於仏前焼香シテ心静ニリンジウノツトメアリ。其後腹ヲ切玉フ。冷泉判官隆豊介錯シ奉リ。……天野藤内。岡部右衛門大夫隆景。木幡四郎。黒川刑部少輔隆尚。杉豊後守兼大宰少貳興運。今八幡大宮司民部少輔右衛門。右田隠岐守統テ腹ヲ切テ皆御供ヲ申サル。」(『中国治乱記』)。○深川の大寧寺。長門国大津郡深川村(現山口県長門市深川湯本)にある曹洞宗の寺。大内義隆及び一族自刃の地で、大内家の菩提寺。○無遮の法会。一切の人々を差別することなく供養すること。

【出典】本話にある大内義隆の御台が側室へ歌を送ったという話は、『武者物語』下、『御伽比丘尼』二二三「恨に消し露の命 付葎がのべの女鬼」、『醒睡笑』五に収載されている(江本)。

【類話】『曾呂利物語』五二三「信玄せいきよのいはれの事」(富士2)。

○深川左近亡霊

*左京大夫大内義隆の家臣、*黒川市左衛門尉俊昌は、大力*武勇の侍なり。*山口の城外にあり、つらく思ふに、世の人死しては二たび間通はすべきたよりなし。さきにむなく成たるもの帰り来りて、生れ所をも語り吉あしをも知らせなば、せめて恨みも有まじきにと悔居けるを、その*傍輩に*深川左近といふものあり。我も内々は此うたがひあり。来世の事はありやなしや、いづれさきだたらんもの、かならず来りて告知らせ侍べらんと契約して、年月をふるあひだに、左近病してさきに死したり。

数日を過る所に、黒川たゞひとり座して書院にあり。日すでに暮はて、月又くらかりしかば、ともし火とらせ、*うそぶきてありし所に、庭の面に*音なふものあり。黒川殿おはするや、家の内何事か

あるといふをきけば、まさしく深川が声なり。あなめづらしや深川どの、こなたへといふに、ともし火を消給へ。ちかくまいりて物がたりせんとあり。黒川ともし火を吹けたれば、深川内に入て、過にし事どもをかたる。その物ごし詞つき、深川が世に有し時に少も替らず。来世の事を問ければ、いかにも後世はある事ぞや。罪ふかければ*地ごくにおとされ、次に深きは*餓鬼道にいたり、罪障のふかさあさきに*差別ありて、もした*畜生にゆき生るゝもあり。いづれすこしなれども、罪科のむくひなしと思ひ給ふな。我よりさきに身まかりし者、*修羅のちまたにうかるゝもあり、二たび人間に帰るもあり。善悪のことはり露斗も違ふことなしと、かたるあひだに、たちまちにけがれてきたなき匂ひの座中に薫じければ、黒川あやしみて、くらまざれにうちらはらへば、深川が身に手のあたりければ、ことの外につめたくおぼえたり。

亡霊ならば、る形ちはあるまじかりけり。*妖物のわざ成べしとおもひ、心を静めて猶ちかく居よりて、手をもつてをしうごかすに、大かたおもし。すでにして深川は、今はいとま申て帰らんとし。平に留まり給へといふに、頻に帰らんとし。漸やく明ぼのに及ぶ。火をともしてよくみれば、深川にはあらで、その長*七尺ばかりなる大の夫の*尸なり。死して久しく日数を経たり。そのうへ暑天にあたりとみえて、股のあたりは爛れたり。臭き事いふばかりなし。その尸をば遠き野ばらにすてたり。あたりの在郷より人おほく出て、此尸を見つけて、あな浅ましやわが兄なり。家の内にて宵のほどに死したるを、忽に失なひけりとて、尸をととりて帰り、*さうれいを営けり。

○左京大夫大内義隆 既出。巻二一五、三一五参照。義隆が左京大夫に任ぜられた年次については、『大内系図』(続群書類従七下)、『公卿補任』、『系圖纂要』には記されていないが、福岡猛市郎氏『大内義隆』(人物叢書 吉川弘文館)は、「享祿三年(一五三〇)に左京大夫に任ぜられた」としている。

○黒川市左衛門尉俊昌 『筑前国統風土記』十六に「宗像大宮司も、大内義興の旗下に属し、山口に参勤す。…大内義隆より、長州黒川・深川両庄を馬の草飼料に給はりて、黒川に居住せしむ」とあり、大内氏と黒川氏、深川氏の主従関係は認められるものの黒川については『中国治乱記』にも見られる(三一五の注「義経以下主従十一人一同に腹切て」の項参照)。俊昌については未詳。 ○武勇 既出。卷一―三参照。 ○山口 山口県中部の地名。正平十八年(一一三六三)京都に模した市街が建設され、大内氏の隆盛とともに繁栄した。特に応仁の乱以後、公卿、禪僧、学者などの来訪が多く、文化の中心の一つとなり大内文化を形成した。 ○傍輩 『Fōba』ハッバイ仲間(日葡)。 ○深川左近 「黒川市左衛門尉俊昌」の項参照。左近については未詳。 ○うそぶきて 「うそぶく(嘘く)」は、風景などをしじみと嘆賞する。『Yeshuqu』ウソブク 月とか花とかなどを眺めながら「感嘆して」はっと息をつく。または、口笛を吹く(日葡)。 ○音なふ 声をかけたり物音を立てたりして、来訪を知らせる。「音 ヨトナフ」(色葉字類)。 ○地ごく 既出。卷一―三参照。仏教語。地下にある牢獄の意。現世に悪業をなした者が、死後その報いを受ける所。「地獄にもまた分ちて八となす。一には等活、二には黒繩、三には衆合、四には叫喚、五には大叫喚、六には焦熱、七には大焦熱、八には無間なり」(『往生要集』上)。また、「地ごく」から、後出の「餓鬼道」「畜生」「修羅」という順序は、『往生要集』に同じ。 ○餓鬼道 仏教語。餓鬼の世界。餓鬼は、飢えて食物を待つ死者。『往生要集』では、地の下五百由旬(古代インドで用いた距離の単位の一つ。一由旬は約七マイル(約一一・二キロメートル)あるいは、九マイルといわれる)にあるといい、慳貪と嫉妬の者が墮ちるといわれている。 ○差別 [Xabet シャベツ 相違・区別](日葡)。 ○畜生 仏教語で畜生道のこと。悪業の報いによって導かれた畜生の世界。または、その生存の状態。 ○修羅のちまた 「修羅の巷」。激しい争乱の場所。「修羅」は仏教語で、修羅道のこと。嫉妬から起こる争い。激しい怒り、情念などのたとえ。「修羅の巷は騒がしや」(謡曲「兼平」)。 ○妖物 既出。卷三―一参照。 ○七尺 一尺は、三〇、三センチメートル。七尺は約二二センチメートル。 ○戸 既出。卷一―

六参照。 ○さうらい 「喪礼 サウレイ」(易林)、「葬礼 サウレイ」(伊京)。

【出典】『郭翁』(『太平広記』三四五)〔富士〕。あらすじは次の通り。

郭翁と劉執謙は仲がよく、二人はある時、この世とあの世が通じ得ない事を残念に思い、先に死んだ者があの世のことを知らせようと約束する。執謙が亡くなって数ヶ月後、翁が独りで居ると、執謙に声をかけられる。執謙に促されたとおりに明かりを消し、昔のことを語る。また、冥途の罪惡、福德の裁判がはつきりして隠せないことを聞く。夜も半ばになると急に汚臭が立ちこめ、翁が手で触ってみると、その体は大変大きく、執謙ではなく妖物であることを知る。しきりに帰りたいと言う妖物を、朝まで引き留める内に空が明るくなった。見ると、七尺もある死体であった。暑い時期で死後何日も経っていたので、腐っていた。郊外に捨て去らせると、近郊の住人が見ていて「やはり私の兄だ。死んで数日になるが、昨夜行方不明になったのだ」と言い、死体をとって立ち去った。

本話は、典拠を忠実に踏襲しており、創作のあとは見られない。

○蜷川親当逢亡魂

都の東山*鳥部野は、古しへ*空海和尚の御師範、*岩淵の勤操僧正遷化し給ひけるを*はうふりしより、今に及びて*墓所の名をすてず。人の*あだなきためしには歌にもよむ事なり。上の山を*あみだが峰となづく。露けき野ばらも時世かはりて、その所だにたゞしからず。

*永享年中の事にや、*將軍義教公は京都の*公方として天下をおさめ給ふ。家臣*蜷河新右衛門尉親当は、かくれなき*武篇の勇士なり。そのころ鳥部野には*妖物ありと*いひはやらかし、女童はおそろしがりて、昼もゆかず。新右衛門聞て、みづから心ねをためさんとして、ある夜只ひとり長刀打かづき、鳥部野のあたりにいたる。さな

さだに*物のあはれは秋にこそあれ、風も一しほ身にしてみても、ゆくゑもいとゞ物悲しく、虫の音までも更ゆく秋を*かこちがほなり。草葉も色かへて露しげきに、かくぞ思ひつゞける。

*鳥部野の草葉色づく秋の夜は

こと更虫の声もかなしき

奥ふかく行けるに、人を葬ふり薪をつみて焼ける火にむかひて、一人の女座してあり。親当行か、り、女のうしろに立て、かゝる野ばらの人げもまれに、すさまじきをおそれもせず、独り座しておはする。その心ありやと問ければ、女こと葉はなくて、

*夏虫のもぬけのからの身なればや

何か残りて物におそれめ

といひければ、親当重ねていはく、かくこたふるは何ものぞと問に、女はおもても見かへらずして、

*岩松無声 風来吟

とて、かきけすやうにうせぬるを、蜷川すこしもおそれずして、もゆる火のまへに立よりて、女の居たりける跡をみれば、しやれ首のくだけたる有しかば、長刀の柄にかけて、火の中にうち入、暫らく念仏をかうしてかへりけり。

人ばなれなる野中に虫の声のみ聞えて物すこきに、*きつね火*をちかたにみえて、松の木ずゑをわたる声より外には、又ことなるものもなし。そのあひだに東の山のはに、*月しろあがりしをたいまつにして、静に家にぞ帰りける。

終

○鳥部野 卷三一二の注「阿弥陀が峰」参照。「鳥辺野 ……天長四年五月勤操ヲ東山鳥部ノ山麓ニ茶毘ス」〔扶桑京華志〕一。「阿弥陀峰 付鳥部野 顕昭拾遺抄に鳥部山は阿弥陀が峰なり。そのすそを鳥部野といふといへり。空海和尚の師勤操僧正遷化せられしを、鳥部山の南のふもとに茶毘せしより、人をくる墓所となれり」〔出来齋京土産〕三。○空海 宝龜五年（七七四）讃岐

国多度郡弘田郷屏風浦（現香川県善通寺市）に生まれる。延暦二十三年（八〇四）遣唐大使藤原葛野麻呂に従い渡唐。大同元年（八〇六）帰国。弘仁七年（八二六）高野山を下賜。承和二年（八三五）三月二十一日、六十二歳で高野山に示寂。延喜二十一年（九二一）弘法大師の諡号。○岩淵の勤操僧正 天平勝宝六年（天長四年（七五四）八二七）。奈良、平安時代前期の三論宗（南都六宗の一つ。中論（中観論）、十二門論、百論の三論をよりどころとして、大乘の教えを説くもの）の学僧。延暦十五年（七九六）平城京の東、高田山下の岩淵寺で法華八講を創始し、八講の先例を開いた。没後の茶毘の日に僧正位が贈られ、出家贈官の先例となる。なお僧正は僧綱の最高の階位。

○はうふり 既出。卷一六参照。○墓所 「墓所 ムシヨ」〔書言字考〕。○あだなき 頼りげないさま。はかない。○永享年中 永享元年（十二）（一四一九）四〇。第一〇二代後花園天皇の御代。○將軍義教公 足利義教。室町幕府第六代將軍（一四二九）四一（在職）。応永元年（一三九四）六月十三日、三代將軍義満の三男として生まれる。嘉吉元年（一四四一）六月二十日、赤松満祐に誘殺される。四十八歳。○公方 中世、幕府の將軍家。また特に、在職中の征夷大將軍を他と区別していうことがある。〔Cudo〕クバウ 日本全体の総大将、あるいは総司令官の位（日葡）。○蜷川新右衛門尉親当 ? 文安五年（?）一四四八。「みながわ」は普通「にながわ」。ただし「蜷 ミナ」〔書言字考〕の読みはある。蜷川氏は中世以来の武家で、物部守屋の孫の宮道氏より出て、親直を祖とする。越中国新川郡蜷川村（現富山市）に在住したので蜷川を姓とした。親当は和漢の才があり、また蜷川氏は室町幕府執事伊勢氏と婚戚関係にあったことから、伊勢氏の代官として、幕府の政所代となり、以後代々政所代をつとめた。なお、親当と一休宗純の逸話は著名（「一休ばなし」一四「蜷川新右衛門親当初に一休にあふ事」）。

○武篇 既出。卷一五参照。○妖物 既出。卷三一参照。○いいはやらかし 「いいはやらす（言流行）」に同じ。言い広げて知れるようにする。○物のあはれは秋にこそあれ 「もののあはれは秋こそまれ」（「徒然草」十九）。「春はただ花のひとへにさくばかり物のあはれは秋ぞまされる」（「拾遺和歌集」雑下）。○かこちがは 恨み嘆く顔つき。○鳥部野の 典拠未詳。

○夏虫の 類歌「夏蟬のもぬけはてぬる身となれば何か残て物おじをせん」
『武者物語之抄』四。 ○岩松無声風来吟 岩の上の松は、風が吹いて来た
ときのみ枝葉を鳴らす。ここでは、自分も物を言いかけられたから話したに
すぎないという意。同様の詩句は『武者物語之抄』四に見られる（ただし振
り仮名は「がんしょうむせいふうらいぎん」。なお類似の詩句に「巖松無心
風来吟」（『醒睡笑』八「頓作」）がある。 ○きつね火 狐の口から吐き出さ
れるという俗説に基づく。闇夜、山野に出現する怪火。「燐火 キツネビ、ヲ
ニビ 博物志 闘戦シ死亡ノ処、其人馬ノ血、年ヲ積ミ、化シテ燐火ト為ル。
時珍ガ云、或ハ出、或ハ没シ、来リ逼リテ、人ノ精氣ヲ奪フ。但、馬鎧ヲモ
ツテ、相戛シテ声ヲ作り、則チ滅ユ」（書言字考）。 ○をちかた 遠くのは
う。「遠方 ヲチカタ」（易林）。 ○月しろ 月のこと。「Tsuqixiro ツキシ
ロ 次第に現れる、あるいは、まさに出ようとしている月とか、または、出
て来る月の光」（日葡）。

【出典】『武者物語之抄』四（江本）。